

奈良県立  
民俗博物館研究紀要

第 9 号

1985

奈良県立民俗博物館

奈良県立民俗博物館

# 研究紀要

第 9 号

---

目次

---

はじめに	山本 實 館長
大和の六斎念仏について —盆行事とかかわる六斎念仏講と その変遷を中心に—	奥 野 義 雄 (1)
村落の共同祈願祭における模擬用具について	大 宮 守 人 (16)
桜井市上ノ郷の神社成立の過程と祭礼 —「オコナイ」の成立と母体—	浦 西 勉 (27)
仕事着について	徳 田 陽 子 (39)
十九夜講について	横 山 浩 子 (44)

---

## は じ め に

昭和49年11月に開館した当博物館は、その後県民の皆様をはじめ、関係各位のご協力、ご指導を賜り、御陰で10年目の節目も過ぎ職員一同新たな意欲と気持をもって、11年目を迎えることができました。顧みますと昭和47年4月に建設準備に着手して以来、13年の歳月を経ているのでありますが、資料の収集、博物館の運営管理に多大の援助ご教示を賜りました各位に、誌上をかりて深く感謝を申し上げる次第であります。

今回お届けします研究紀要第9号は、過去10年間の蓄積をもとに学芸員諸君が日常の研究活動の成果の一端をまとめたものであります。もとより資料の収集調査、研究内容等不十分のそしりを免れるものではありませんが、今後ますますの努力を重ねてまいり所存であります。層一層の御指導を賜りますようお願いいたします。

昭和60年3月

奈良県立民俗博物館

館長 山 本 實

# 大和の六齋念仏について

—盆行事とかかわる六齋念仏講とその変遷を中心に—

奥 野 義 雄

## はじめに

大和にのこる仏教的な「講」には、百万遍数珠繰り念仏（ジュズクリあるいはズズクリと呼ばれている）、双盤念仏、六齋念仏などがあり、これらは一般に「念仏講」と呼ばれてきた人たちによって営まれてきたが、大和に現存する「念仏講」も数少なくなってきた。

ここでは、六齋念仏とその念仏講について焦点をあてて、これとかかわる盆行事についても触れていきたい。また、大和の六齋念仏のもつ特色について、六齋念仏講の所持している用具から検討を加えていきたいと考えている。

さらに、小稿では、現状の六齋念仏の民俗事例やすでに消滅した六齋念仏の念仏講衆のいい伝えを示すだけでなく、大和の各地域に遡る六齋念仏講衆の記念碑的存在である数多くの念仏講碑に刻まれた銘文が語りかける変遷には、大和の六齋念仏があゆんできた展開過程を知ることができる。そして、この展開と併せて、大和の村落に定着した六齋念仏を想定する手掛りを捉えることができると考えたからである。

これらのことを、ここで考えていくが、この大和の六齋念仏についてはいくつかの課題を含んでいる。つまり、ここで繙こうとする課題以外に、村落に定着する以前の六齋念仏講がいかなる講衆団と結びつくものか明確にしがたい。さらに、正中二（1325）年四月日の年銘をもつ山添村大西（極楽寺）の五論塔の銘文にみる「念仏衆」や、応永三（1523）年の銘をもつ天理市備前（天皇神社）の棟札に墨書されていた「一結衆」という念仏衆の集団とのかかわりについてもまだかでない（土井実『奈良県銘文集』所収）。

このように大和の六齋念仏については、数多くの課題が内在するが、ここでは二、三の課題を検討するにとどめたい。

## 1. 近畿の盆行事と六齋念仏

大和の盆行事と六齋念仏を繙く途で、大和の周辺の盆行事や六齋念仏を垣間見ることによって、大和の盆行事と六齋念仏の特色が提示し得るのではないかと考える。

そこで、ここでは盆行事に関与している六齋念仏について、いくつかの民俗事例からみていくことにしたい。

### ① 和歌山県の六齋念仏と盆行事①

日高郡南部川村<sup>かしの</sup>に伝わる六齋念仏講は、毎年の盆に光明寺で執行される。300年伝来のもので八月十四～十五日・二十三日に盆行事として勤められる。素朴な信仰をあらわし鉦に合わせて高唱する曲調は紀南地方に浄土信仰を布教した盛時を偲ばせるものがある。

### ③、大阪府の六齋念仏と盆行事②

池田市とか、その北にある箕面市<sup>みのお</sup>止々呂美<sup>とどろみ</sup>では六齋念仏をヒツツンツンとよんだ。この名の起り方は六齋の練習をする時、膝や畳を打ってする拍子から来たものという。止々呂美ではこの調子で四個の太鼓と二個の鉦とを叩くのであるが、打ち方には、七つヌキ・五段・二つヌキなどがある。発願文に始まり、正座に着いた鉦がこれに続く称名の一節を声高らに唱えると、四隅へ分かれてうずくまっていた太鼓がいっせいに立ち上がり、腰をひねり、膝を曲げつつ巧みに打ち始める。止々呂美には各字に一つずつ講社があり、寺院の法会・初盆・葬式の供養にこれが行なわれた。

池田市の旧尊鉢町では鉦四・太鼓四の八人衆で、一回の所演時間は約一五分、鉦・太鼓の囃子に「なむあみだ」とか「賽の河原のお地藏は」とかの歌がはいる（下略。この後文に豊中市の六齋念仏と盆行事との記載がある）。

### ④、京都府の六齋念仏と盆行事③

六齋念仏は八月盆の精霊迎いのころから同二十三日地藏盆のころまで地元の六齋講中によって行なわれ、六齋踊りともたんに六齋ともいう。壬生（中京区）・千本（上京区）・嵯峨（右京区）・梅津（右京区）・桂（右京区）・西七条（下京区）・西京極（右京区）・下津林（右京区）・小山（北区）・西賀茂（北区）・上久世（南区）や、地名の中堂寺（下京区）・吉祥院（南区）・西院（右京区）など旧市内とその周辺に十数組の六齋講が現存もしくは近ごろまであったが、以前はもっと多かった。この期間中、講中はそろいの浴衣で鉦・笛・太鼓の囃子に踊りを交えて、念仏勧進の詠唱をしながら地元の各家をまわり（棚経とか勧進という）、その芸能を特定社寺に奉納し（物詣という）、あるいは日を定めて地元の社寺に舞台を設け所伝の芸能を上演（イッサンウチといえ（口絵参照））して多くの観衆を集める。

### ⑤、滋賀県の六齋念仏と盆行事④

湖西地方には現在二地域にロクサイネブツ<sup>ろくさいねんぶつ</sup>（六齋念仏）が伝わっている。その一つは雄琴周辺<sup>ほしなほ</sup>の干菜寺系統とみられるものである。たとえば真野<sup>まの</sup>の法界寺の念仏にはシゼン念仏・ハクマイ念仏・オロシ念仏の三種がある。シゼンは頭者・脇一二人、ハクマイは頭者・脇二四人で行なわれ、やや曲調を異にする。近年はよい頭者も得がなくなり、しだに行なわれなくなった。以前は春秋彼岸・地藏盆・十夜にはかならずシゼンとハクマイを唱え、葬式には門念仏にシゼン、野返しにシゼンとハクマイ・オロシの全部を行なったものという。（下略。後文には、もう一つの朽木谷針畑地区に残る空也寺<sup>くうや</sup>系統のものである）。

## ⑬、兵庫県の六齋念仏と盆行事⑤

豊岡市田結ではいまでも齋衆が、盆のショウリョウサンオクリ（精霊さん送り）のすんだ翌日から毎夕、二つ鐘を合図に氏神八坂神社の前に、ゆかた姿に輪びさをかけ、数珠や鉦を持って集まり、お宮から村の中を歩いて浜に至るまで、村の安全、五穀の豊饒を祈りつつ、九日間念仏を唱えて歩く。浜で海に向かってあらためて念仏を唱える。昔は正月と盆にそれぞれ十八日間勤めたという。

大和に近接する府県および周辺の地域の六齋念仏と盆についての民俗の報文を挙げたが、これらの民俗事例をみれば、六齋念仏と盆行事が深くかかわっていることを知る。

そして、六齋念仏の事例をみると、①の事例と④事例を除いて、②③⑤の事例の六齋念仏には鉦念仏と太鼓念仏が存在することが窺える。

とくに、③事例の京都の六齋念仏には、〈踊り〉を伴わない所謂〈京都系六齋念仏〉の本流を示しているといわれているが、念仏の〈踊り〉を提示してくれる現今の民俗事例は数少ないといえる。所謂身振り・手振りを伴う六齋念仏としては、①の事例にみる真野（法界寺）の六齋念仏も、事例を挙げなかった福井県の瓜生の六齋念仏もその範疇にはいるが、⑥京都の六齋念仏には風流的要素が濃く内在していると考えられる。

一方、①と④の事例が示すように、この和歌山県の晩稲の六齋念仏も、兵庫県の田結の六齋念仏も、鉦念仏である。とくに、晩稲の六齋念仏は、同県内の天野の六齋念仏と同様に所謂「高野系六齋念仏」である。

このように大和の周辺の六齋念仏のほとんどが盆行事とかかわりを示すとともに、従来からいわれているように六齋念仏の二系統が大和ではどのように展開しているかを、盆行事と関連づけて次にみていくことにしよう。

註① 野田三郎『日本の民俗・和歌山』所収。

和歌山県の晩稲の六齋念仏は、昭和54年の地藏盆の際に実見し、鉦念仏によることを知る。そして、晩稲の六齋念仏が念仏和讃を主にした念仏であることを、所謂「つぼ書」によって窺えた。さらに、六齋念仏講衆は、往時の折に10余人程であったと記憶している。

② 高谷重夫『日本の民俗・大阪』所収。

③ 竹田晴洲『日本の民俗・京都』所収。

京都の六齋念仏は、吉祥院六齋念仏と千本六齋念仏を昭和52年と53年に実見しているが、他地域の六齋念仏にはみられない優麗さがあり、風流的色彩を帯びている。そして、六齋念仏の演技曲目は15曲目あり、「発願」（念仏唱和）からはじまり、「阿弥陀打ち」（念仏唱和）で終るが、この間に「豆太鼓」（なにわ、道成寺、素雅楽、山姥）、「四ツ太鼓」、「豆太鼓」（萬歳、碓、法縁祭）、「手踊」（願人坊）、「豆太鼓」（八島）、「獅子太鼓」、「獅子碁盤乗り」、そして、「蜘蛛の精」などがある。

④ 橋本鉄雄『日本の民俗・滋賀』所収。

真野・法界寺の六齋念仏については昭和52

年に実見し、太鼓念仏と鉦念仏の行なわれていることを知る。この六齋念仏の念仏太鼓は、現存していないが奈良市秋篠、法華寺、佐紀町の六齋念仏の所持していた念仏太鼓と酷似し、佐紀町の場合には存命中の講衆の一人（村田友治郎氏）の話から、念仏太鼓をもって唱える途の身振り・手振りも近似しているところから、同系統の六齋念仏と考えられる。

⑤ 和田邦平『日本の民俗・兵庫』所収。

⑥ 齊藤楓堂『日本の民俗・福井』所収。



▲東佐味の六齋念仏講とお盆（御所市）

## 2. 民俗事例からみた盆行事と六齋念仏

近畿および周辺の六齋念仏について窺ってきたが、そのほとんどが盆行事や地藏盆とかかわっていることを知る。

このことは、大和においても同じことがいえるとともに、六齋念仏講が所持する用具においても大和以外のものと同種のものであることを知る。

この用具については、別稿でも若干触れたように、大和において二分し得るようである（『大和の念仏講について—六齋念仏を中心として—』、『まつり』39号所収）。また、同稿では、大和にのこる六齋念仏講を中心に、民俗事例の提示という意図で素描したが、ここでは現存の六齋念仏講とともに、すでに消滅してしまっているが、その伝承がのこっている六齋念仏講も含めて、盆行事とのかかわりの中で緋いていくことにしたい。

したがって、まずすでに別稿で触れた現存例や消滅してしまった伝承の例の紹介からはじめ、大和の六齋念仏講の諸相を捉えていくことにしよう。

### ①、奈良市八島の六齋念仏と盆行事①

この村の六齋念仏は15人程の講衆によって営まれている。そして、この六齋念仏講衆によって、春秋彼岸、盆行事、涅槃会、葬送そして法事（タイヤ）の時期に六齋念仏が唱えられる。

とくに、お盆の時期になるとこの六齋念仏講にとっては多忙な三日間となる。すなわち、盆の13日には、講衆によって新仏（アラタナ）のある家に詣でて、六齋念仏を唱える。14日には、村中の大念仏宗の家を廻わって、先祖代々の精霊（オショライ）の霊前で六齋念仏を申すのである。

このお盆のときに唱えられる六齋念仏は、13日と14日とは本来異なり、新仏に対しては鉦念仏といって、念仏鉦を叩きながら六齋念仏（ハクマイ、シセン、バンドウと称する「南無阿弥陀仏」の六字名号だけの念仏を唱える。それぞれフシが異なる）を唱える。また、先祖代々の精霊には、太鼓念仏を申すが、鉦念仏も唱えられるということである（この太鼓念仏には、サイノカワラ、ジゴクジゴク、ネンブツギョウジャの念仏和讃がある）。

一方、盆行事であるが、初盆つまり新仏のある家では、アラタナをつくり、墓詣りを13日に行ない、新仏のない普通の家では、夕刻までに仏壇を清掃して供物を供える。そして、夕刻には精霊を迎えに墓へ詣る。このとき、辻々に線香を立てて、精霊が迷わず帰れるようにする。かつては、線香ではなく、小麦ガラをもやして迎えたということである。この日、初盆の家へ六齋念仏講が訪れて念仏を唱える。

そして、盆の14日には、一日中先祖代々の精霊にオチャト（御茶湯）を供える。この日、六齋念仏講によって同じ宗派の家々を廻って念仏が申される。また、15日の朝には、家々で先祖代々の精霊が送られる。この精霊送りには、線香をたいて墓まで行く。この日供えた物は、今日ではビニール袋に入れて捨てるが、かつては川へ流した

とのことである。

このように盆の13日と14日が、主な盆行事であり、この両日に六斎念仏講が関与する(このほかに葬送のときに鉦念仏を一斎〔曲〕、涅槃会と春秋彼岸にタキバン〔当番〕の家で六斎乃至四斎程を、講衆が唱えるが、詳細は略す)。

## ②、御所市東佐味の六斎念仏と盆行事②

この村でも六斎念仏講が現存し、六斎念仏は、春秋彼岸、涅槃会、盆、観音会、法要(タイヤ)そして葬送のときに唱えられる。この念仏講は、地元では「六斎講」と称されている。現在の講衆の人数は五人(二年前には八人)で、お盆の13日には新仏の家を廻って六斎念仏を唱える。この六斎念仏は、すべて鉦念仏であり、13日の新仏に申す念仏も14日の先祖代々の精霊に唱える念仏も同じものであるということである(シヘン、ハクマイ、バンドウ、シンハクマイと呼ばれる四斎が鉦にあわせて唱えられる)。この14日には、六斎念仏講衆が二組に分かれて、村中の真言宗の家々を廻って、精霊に念仏を唱える。また、この日講衆は村外の有縁の家へも赴き、六斎念仏を申すのである。

一方、この村の盆行事であるが、初盆の家では13日の当日までに精霊棚(アラタナ)をつくり、当日に家の縁先に祀る。このアラタナも家々によってその規模は異なり、大きい棚としては150cm程の高さで、35cm程のヤカタ(本体)のものがあり、小さい棚としては100cm内外の高さで、25cm内外のヤカタのものがあり、このヤカタに新仏を祀る。そして、このヤカタに供え物を置き、線香をたいてローソクをとす。この新仏に対して、先祖代々の精霊は仏壇に祀られ、この日果物などを供える(供え物の詳細は略す)。また、オチャトもかかさず供え、線香をたき、ローソクをともして祀るが、それ以前に墓へ詣って掃除をし、精霊を迎える(迎え火)を行なったが、今日ではこの風習はなくなったということである。

そして、14日には、迎えた精霊を一日中オチャトをかかさず供えて祀り、この日に六斎念仏講衆が先祖代々の精霊に念仏を申すために訪れる。15日の当日には、昼までに精霊を送って、供物をかたづける。

この供物は、今日では捨てるが、かつては村内を流れる小川に流したとのことである。

## ③、奈良市古市南の六斎念仏と盆行事③

この村の六斎念仏は10年程前(昭和48年まで行っていた)になくなり、今日では、六斎念仏講衆のいい伝えのみが六斎念仏を知る手掛りとなっている。

この村の六斎念仏は、鉦念仏のみで、涅槃会、春秋彼岸、お盆、そして葬送のときに唱えられたのであるが、隣接村の八島や藤原と異なり、太鼓念仏がない。お盆のとき(消滅直前)には、六斎念仏講衆七人が二組に分かれて、大念仏宗の家々を廻って六斎念仏の四斎(二組に分かれて、一組二斎ずつ)を唱えたということである(サイノカワラ、ナナツゴを除いて、シヘン、ハクマイ、バンドウ、ミダノガンが唱えられ



た。サイノカワラは子供を死なせた親のために、ナナツゴは親と死別した子供のために唱えられた)。

一方、この村の盆行事は、さきに触れた①の事例と同様であり、盆の13日には墓へ行き、掃除して先祖代々の精霊(オショライ)を迎える。かつては、村の辻々でオガラをもやして、精霊を迎える〈迎え火〉があった。精霊を仏壇に迎えて、オチャトと果物などを供える。また、新仏(アラボトケ)のある家では、仏壇の横にアラタナを置いて祀る。14日は、かつてあたたかいオチャトをたやさずに供えたが、今日ではこれも簡略化されているということである。この日、10年以前には六斎念仏講が各家を廻って念仏を申したが、今日では徳融寺から僧侶がきて読経するのみである。そして、15日には、先祖代々の精霊や新仏を送る。この日にアラタナも焼かれる。また、供えられた供物もかたづけられて捨てられるが、かつては川に流したということである。

#### ④、奈良市中山の六斎念仏と盆行事④

この村の六斎念仏は、すでに絶えて久しい。消滅して60~70年になるということであるが、六斎念仏講のいい伝えのみがのこっている。しかし、この伝承も六斎念仏講に直接関与した講衆によるものではないため、お盆以外にどのようなときに六斎念仏を唱えたのかはさだかでない。

ただ、お盆に六斎念仏が唱えられたことは確かであり、この村の六斎念仏も鉦念仏と太鼓念仏の二つの形態があったことを知る。しかし、この六斎念仏とくに鉦念仏が白米(ハクマイ)、阪東(バンドウ)、四遍(シヘン)などと呼ばれる念仏であったのかさだかでない。また、太鼓念仏がいかなる念仏和讃であったのかも明確ではない。

しかしながら、六斎念仏講によって盆の13日には新盆の家に赴き念仏を唱え、14日には村中の家々を廻って念仏を唱えたということが村の古老から窺えた(このことは、他の民俗事例と同様であることが理解できる)。

一方、この村の盆行事は13日の仏壇の清掃と墓詣りと迎え火によってはじまる。当日の昼までに仏壇を掃除し、そして墓へ詣って清掃した後、かつては辻々で迎え火のオガラをたいだが、今日ではこの行事はほとんど消え去っている。この日新仏のある家では、前日からつくった飾り物(ラクガンでつくった造り花など)を祭壇の左右に飾り、最上段には新仏の御影を置いて、各段には供え物が並べられる(御影の下段にはオチャトを左右に造り花、その下段には果物と左右に造り花、そして最下段に線香とローソクが置かれ、床面からこの段に梯子がかけられる)。この祭壇が新仏のアラタナである。この祭壇のある部屋の縁先には盆灯籠が飾られる。かつては、親戚の人々が初盆のために持参して飾り、多い家では10灯内外にもなったということである。この日に六斎念仏講は新仏の家で六斎念仏を唱えた。また、14日には特別なことは行わないが、オチャトは先祖代々の精霊にかかさず供えられる。そして、15日には供え物のかたづけでもやす。初盆の家では、アラタナを早朝から競ってかたづけて、造花

などの供え物をもやす。この競い合いは古くから行なわれていて、地元では「新仏が人より早く帰えられるように」といい伝えられている。また、この日には先祖代々の精霊を送るが、かつては迎え火と同じよう辻々にオガラをたいて精霊を送ったが、この習慣は現在行なわれていないという。

#### ⑤、奈良市佐紀町の六齋念仏と盆行事⑥

この村の六齋念仏は、13年前（昭和47年頃）に絶えて現存していない。この六齋念仏には、太鼓念仏と鉦念仏があったことをその用具からも窺える（太鼓6点と鉦2点は昭和56年に寄贈されて民俗博物館藏品となっている）。また、この六齋念仏の絶える直前には、三人の老六齋念仏講員が村内の光明寺でお盆のときに六齋念仏を唱えたことや、その時期から10年程前には10余人の講員がいて、お盆のときに新仏の家や村中の各家を廻わって六齋念仏を唱えたことを、老講員の話から知ることができる。つまり、この佐紀の六齋念仏は、鉦念仏のシヘン、ハクマイ、バンドウ、そして太鼓念仏三齋（すでに昭和47年頃には曲名も明確ではなく、この念仏の和讃を唱える講員はいない）。この六齋念仏のどの念仏が、お盆のときに初盆の家で唱えられたのか、また各家の先祖代々の精霊に詠唱したものかさだかでない。

一方、盆行事は、8月13日から15日にかけて営まれるが、10日から盆行事の用意と夜に墓詣りを行なう場合があり、これを十日盆という（20日に行なう二十日盆もある）。このことはともかく、この村の一般的な盆行事は13日から始まり、墓詣りを午前中にすませて、夕刻に村の辻々でオガラをたいて精霊を迎える（かつては、墓詣りは朝のうちに行なわれたということである）。また、この日新仏（アラボトケ）のためにつくったあるいは買い求めたアラタナを仏壇の横に設けて、先祖代々の精霊と同様に供え物を霊前に



▲六齋念仏講碑（生駒市乙田）

置く。そして、この日には初盆の家へ六齋念仏講が訪れて念仏を唱えた。

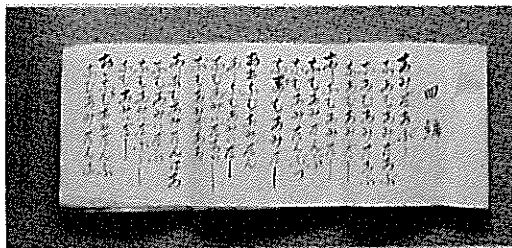
また、14日には、一日中あたたかいオチャトを供え、お寺から読経にきてもらう。この日にも、僧侶による読経とは別に、六齋念仏講が各家を廻わり、六齋念仏を唱えたということである。

そして、15日には、新仏の霊も先祖代々の精霊を送り火（かつてはオガラ）をたいて送る。この日にアラタナを焼却し、供え物は川へ流したが、今日では供え物は捨ててしまうということである。

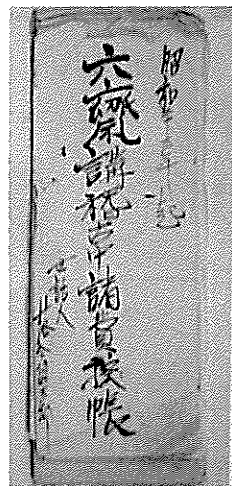
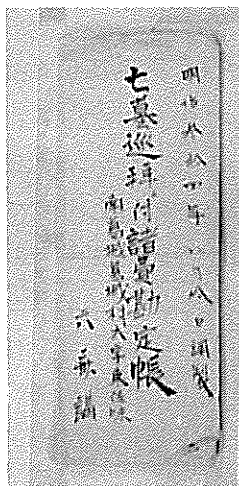
このように①から⑤の事例までをみるかぎり、六齋念仏と盆行事とのかかわりは深く、村落内の相互扶助の役割をもっていたことが理解し得る。

このことは、①～⑤の事例によるだけでなく、大和郡山市額田部北町・南町の六齋念仏（鉦念仏）、奈良市大安寺町の六齋念仏（鉦念仏）、安堵村東安堵の六齋念仏（鉦念仏）、そして奈良市藤原の六齋念仏（太鼓念仏と鉦念仏）が盆行事と深くかかわっていたことが、それぞれの六齋念仏講衆のいい伝えによってわかる。これら六齋念仏講で現存している地域は、大和郡山市額田部北町・南町の六齋念仏講であり、〈大宝寺六齋念仏〉と呼ばれている。

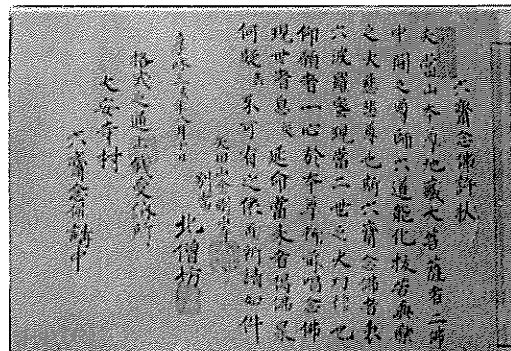
一方、盆行事においても、①から⑤の事例をみるかぎり、大きな差異はないと大雑把に捉えることができる。しかし、各村落で営まれる盆行事の内容に若干の差をみることができ、これらが村落ごとの特色と見做し得ると考えている。とくに、奈良市中山の初盆の精霊のヤカタは、他の地域には見られないものである。そして、ここでは詳細に触れなかったが、仏壇の精霊に供える供え物にも地域ごとの特色を示している。たとえば、奈良市八島の場合、精霊に供える供え物の一つに特色がある。ボンの上にハスの葉を置き、この葉の上に精霊一霊分としてナスビ、ササゲ、カキ、アゼマメ、ウリ、ミンハギ、トマトの



▲つぼ書(大和郡山市額田部北)



▲七墓巡拝勘定帳(佐)と六齋講諸費控帳(御所市東佐味)



▲六齋念仏許状(奈良市大安寺町)

七品を、七霊分をつくって置いて、七霊分の箸をそなえるのである。

この供え物とよく似た供え方をするのが、八島に近接する奈良市古市南の先祖代々の精霊に供える供え物であり、精霊分の供え物が用意されるのである。

このように大和の盆行事には、村落ごとに特色ある行事内容をもつとともに、各村落共通の行事内容をもつことが窺える。そして、この盆行事に関与してきた六斎念仏講と六斎念仏にも、大きく二つに分けることができるとともに、二分した六斎念仏の一つはさらに二分することができるようである。

いいかえると六斎念仏の所持する用具から、念仏鉦のみの六斎念仏と、念仏鉦と念仏太鼓を合わせもつ六斎念仏との二つに分けることができる。そして、念仏鉦と念仏太鼓をもつ六斎念仏も念仏太鼓の形態によって二分し得るのである。とくに一方は滋賀県の真野の六斎念仏や大和の佐紀の六斎念仏にみる念仏太鼓の系統であり、他方は念仏太鼓二つを天秤棒の両端に付けて二人の講衆が念仏和讃を唱える形態のもので、大和周辺ではその類例をみないのである。つまり、奈良市八島の六斎念仏の念仏太鼓がこの形態のものであり、ここでは便宜上「八島・藤原型六斎念仏」と呼んでおくことにしよう。これに対して前者を「佐紀型六斎念仏」と称することにするが、大和でもこの「佐紀型六斎念仏」の系統のものには、奈良市佐紀、秋篠、法華寺、二条、上村、鹿野園、中山、そして忍尋山の六斎念仏がある。これらの六斎念仏のほとんどは現存していないが、近年絶えた奈良市佐紀の六斎念仏によって、かろうじてその一端を知ることができる程度である。

この「八島・藤原型六斎念仏」と「佐紀型六斎念仏」の系統に対して、念仏鉦のみの六斎念仏をここでは「東佐味型六斎念仏」と便宜上呼称しておくが、この系統の六斎念仏には、すでに触れた奈良市大安寺、生駒市乙田、大和郡山市額田部北町・南町、そして安堵村東安堵などがある。この系統の六斎念仏のほとんども老講衆数人で細々と続けているか、すでに消滅してしまっているかである。

とくに、消滅してしまった六斎念仏の所持していた念仏鉦が、六斎念仏講衆が語りかけない片隣を若干でも提示してくれるであろう。

このように六斎念仏と盆行事とのかかわりと、盆行事の行事内容の共通および特色と、さらに六斎念仏の大和における特質を窺ってきたが、この六斎念仏がいつ頃から大和に定着し、村落内でどのように展開していったかを、文献史料とりわけ金石文をとおして次に検討していくことにしたい。

註① 八島の六斎念仏講衆の古老から聞取ったものであるが、隣村の藤原の盆行事と六斎念仏も同様の形態である。また、八島の盆行事と六斎念仏講については、すでに実見済みである。

② 東佐味の六斎念仏講と盆行事については、同念仏講衆の人たちから聞取ったものである。ただ、本文中で触れなかった盆行事の習俗で、かつて盆の時期の一ヶ月間は各家で提燈を門口に吊るしたが、今日ではほとんど消え去っている。

③ 古市南の盆行事と六斎念仏については、六斎念仏講が解散する直前に講衆の古老から聞取ったものであり、10余年前の事例である。また、往時の六斎念仏は、すでに実見している。

④ 中山の六斎念仏と盆行事については、地元の古老から聞取ったものであり、盆行事については、すでに5年前に実見したもので、この時期の事例によった。

- ⑤ 佐紀町の六齋念仏については、念仏講の古老（すでに物故者）から聞取ったものであり、この事例は往時（昭和51年頃）のものである。

### 3. 大和の六齋念仏講の変遷

大和の六齋念仏講を盆行事とのかかわりでみてきたが、この念仏講は、大和の各地にいつ頃から定着しはじめたのであろうか。

ここでは、大和の六齋念仏講の変遷を金石文や文献などから緋いてみることにしたい。

まず、大和の六齋念仏講を金石文から、その上限を1460年代と考え得る。すなわち、香芝町二上の弥陀石仏に刻まれた「六齋念仏之為」「寛正四年癸未十月十五日」という文言がそれである。①そして、この1400年代の年銘をもつ「六齋念仏供養」碑が五條市牧野字畑田（旧宇智郡牧野村畑田）の西福寺にあり、延徳二（1491）年九月十五日の年銘をもつ板碑がそれである。この1400年代以後、すなわち1500年代になると金石文に六齋念仏講衆によって造立された石造物は少なくなり、その下限は1600年代初頭であることを、次の山添村片平の浄妙寺の「六字名号石碑」から窺うことができる。すなわち、

	道玄妙春
慶長十七 <sub>丁</sub> 年三月廿六日	道観道西
南無阿彌陀仏	道□
六齋念仏衆	道□道裕
	道春弥六

という刻文がそれで、「道玄」以下7人の六齋念仏衆によって造立されたことがわかる。

この六齋念仏講にかかわる金石文の年代の上限と下限の間には、次の年銘をもつ六齋念仏講碑が存在する。

- |                        |            |
|------------------------|------------|
| ①御所市茅原（吉祥草寺）の五輪塔残欠     | * 勸進六齋念仏之衆 |
| □□念仏衆                  | 良珍 弥三郎     |
| □梵                     | 助三郎 助四郎    |
| 永正九年 <sub>丁</sub> 三月   | 与四郎 作太郎次郎  |
| ②吉野町吉野山（勝手社）の梵鐘        | 与八郎 又四郎    |
| 金峯山寺                   | 弥五郎 左衛門次郎  |
| 勝手社鐘一口                 | 次郎太郎与四郎    |
| 永禄八年 <sub>丁</sub> 八月廿日 | 孫七 小太郎     |
| 法印権大僧都 真尊              | .....      |
| 法印権大僧都 実遍              | 源七 才六      |
| 一臈                     | 弥次郎 兵衛次郎   |
| 権律師 快遍                 | 又次郎 才次郎    |
| 本願 海尊                  | 又次郎 弥八     |
| .....*                 | 入道 脇大工清十郎  |

- 大工当国下田往  
左衛門助  
中□五貫文六田念仏□
- ③生駒市菜畑（菜畑会所）の六字名号碑  
サエモ四郎  
六齋夜念仏一結衆 ト ウ ハ  
祐 実 サエモ九郎  
与 二 郎 太郎二郎  
ヤ 六 郎 チン四郎  
ケン二郎 九郎二郎  
又 六 郎 与 三  
キ 三 郎 四郎三郎  
ヤ 三 郎 セン五郎 ※
- ④大和郡山市小泉（楠地藏）の板碑型地藏  
天正二年<sup>甲戌</sup>  
奉造立名号六濟  
衆三十六人居念  
仏衆五十五人為祈  
南無阿彌陀仏 仏果菩提也竝 ※※ 十一月十五日  
\*\*\*当城打死衆来年  
相迎□□□為頓  
証并也乃至法界平  
等利益矣各敬白
- ⑤桜井市初瀬（万福寺）の六字名号碑  
六十八 萩原 三十八 修理枝 四十八 藤井 七十八 栢森 九十八 貝平 五十八 仁興 □ 四十八 六十八 山□  
奉供養為修六濟念仏弟子衆千人……………  
道心禪門太工  
梵 南 無 阿 弥 陀 仏 道慶禪門  
笠村百人妙尼  
妙善禪尼  
妙音禪尼妙西  
慶長十四年二月廿四日城上郡笠村大夫敬白  
三谷 芹井 白木 吐山 三□ 白石 鞆田 平田  
七十八 三十八 五十八 七十八 十八 九十八 五十八 廿五人

このように①から⑤までの金石文をみるかぎり、大和の六齋念仏講は、中世後半からみられるとともに、地域的にみても広範囲に亘っていたことが窺える。さらに、現存する六齋念仏講衆が10人（言い伝えによると15人程度）内外の人数であったのに対して、かなりの人数が講衆として参加していたことを知る。たとえば、②の金石文に現われた六齋念仏

講衆は21名、③の金石文の場合には六齋念仏講衆は28名と居念仏者9人、④の金石文にみえる六齋念仏講衆は36人と居念仏者55人、そして⑤の金石文に現われた六齋念仏講衆は735人（六齋念仏弟子衆千人と刻文されているが、各村落の参加者の総数と異なる）であったことを知る。ただ、この⑤の金石文にみる各村落ごとの六齋念仏講衆は10人から90人に亘るように各村落でも異なることが窺える。

このように中世後半から末期に至る金石文から、この時代の六齋念仏講衆は、現存の六齋念仏講衆に比べて多人数で、また村落間の交渉も少なからず存在していたことも理解し得る。

では、名村落における六齋念仏講およびこの念仏信仰が、この中世後半あるいは末期以後どのように展開していったのかも興味ある点である。

このことについて次のいくつかの金石文をとおして、村落ごとにおける六齋念仏講の足どりを辿ってみることにしよう。

④奈良市法華寺町の場合

<sup>(1612)</sup>  
慶長十七年十二月十三日  
法華寺□齋衆十人（人名多数を刻む）

↓  
和邇法華寺村念佛講中  
寛文<sup>(1671)</sup>十一歳

（下略）

↓  
于時嘉永<sup>(1853)</sup>癸丑年七月

南都法華寺村六齋念仏講②

⑤生駒市乙田の場合

<sup>(1576)</sup>  
天正四年十月十五日  
乙田村六齋念仏人衆四十二人  
居念仏五十六人各々敬白

↓  
<sup>(1601)</sup>  
慶長六年二月十五日  
六齋念仏講衆卅八人

居念仏八十七人 乙田村

↓  
（念仏鉦の刻文には、江戸時代）  
後半の年銘があったという）

⑥生駒市萩原の場合

<sup>(1547)</sup>  
天文十六年十一月十三日

\* 念仏人数廿六人

居念仏人数四十七人敬白

↓  
<sup>(1585)</sup>  
天正十三年三月吉日

萩原十五日念仏人数五十一人 敬白  
六齋衆廿六人

⑦桜井市栢森の場合

<sup>六十八</sup>萩原 <sup>三十八</sup>修理枝 <sup>四十八</sup>藤井 <sup>七十八</sup>栢森 <sup>九十八</sup>貝平（下略）  
奉供養為逆修六齋念仏弟子衆千人

（中略）

<sup>(1611)</sup>  
慶長十四年二月廿四日（下略）

↓  
<sup>(1715)</sup>  
日 正徳五乙未歳  
梵 南無阿彌陀仏六齋念仏供養 栢森村  
牌 八月彼岸建之

（都祁村白石・興善寺の古位牌）④

↓  
<sup>(1848)</sup>  
嘉永元年申十月仏日 蓋森村（右横台石）  
南無阿彌陀仏（正面）

世話人 彌四郎、彌治、定七 <sup>（正面台石）</sup>  
利八、源四郎、長右門  
兵治、彌二兵エ、伝治

（都祁村白石・興善寺の名号石）⑤

⑤平群町椿井の場合

(1544)  
天文十三年六月十四日

椿井六才念仏衆四十八人 夜念仏入亡



(1583)  
天正十一年七月七日 \*

\* 六齋八十人

逆修 各敬白



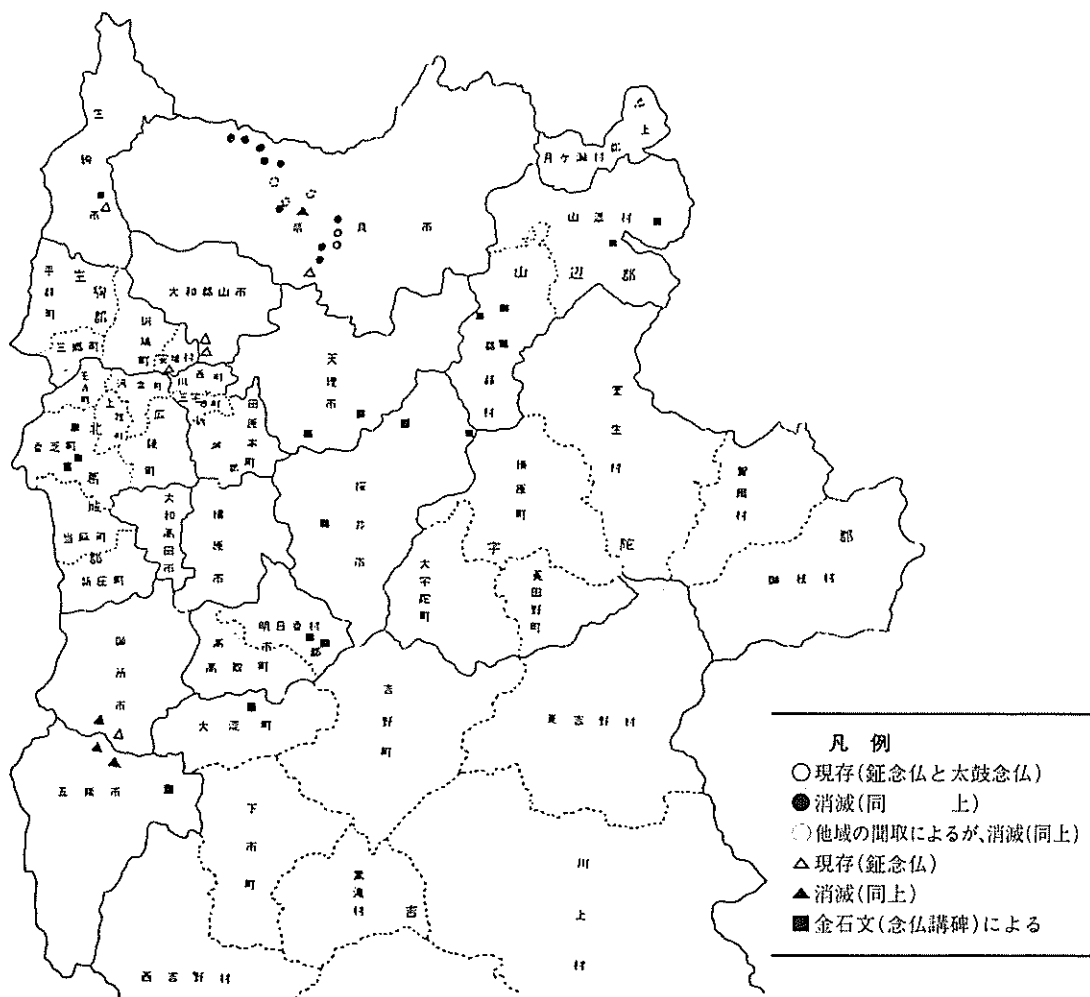
(1613)  
慶長十八年七月十五日

六齋念仏講衆四十八人逆修

これらの村落における六齋念仏の変遷は、1500年代から1600年代に至る時期に限られるが、その後の存在は民俗事例によって知ることができる。

たとえば、①の桜井市栢森の場合には、慶長十四（1611）年→正徳五（1715）年→嘉永元（1848）年と六齋念仏講が存在し、さらに現在の民俗事例つまり同村落の古老の話から、

大和の六齋念仏講の分布





今も現存し、35年程前には「六齋衆」（六人衆）がお盆の十四日に村中を廻ったが、今は行っていないことを知る。⑥

同様に⑥の生駒市乙田の場合も今日まで辿ることができる。とくに40年代にはすでに消滅してしまっているのであるが、六齋念仏の「つぼ書」が明治二五年に作成されたことと併せると、<sup>7</sup>天正四(1576)年→慶長六(1601)年→(江戸時代後半?)→明治二五(1892)年→昭和四十年代(現存年代)へと六齋念仏講が約四世紀に亘って存在しつづけたことを知る。

このように④から⑥までの村落の六齋念仏講の多くは、1500年代の4～50年に現われるのであるが、この④⑤⑥の村落以外にも同様な時期のものとして、斑鳩町や西吉野村和田や平群町下垣内などがある。すなわち、

天文十七年六月廿三日

六齋念仏講衆十八人

[斑鳩町・極楽寺墓地・名号板碑]

延徳三年十一月十五日

奉彫石塔 為□□六齋願衆人数二百十人也

本願 西俊 珍阿 敬白

[西吉野村・二百十人塚・五輪率塔婆]※

\* 天正四年十二月十五日

六齋一結衆

[平群町・円通寺・名号板碑]

という刻文がそれらであるが、平群町の場合は「天正六年八月十五日 六齋念仏衆六十人」というもう一つの名号板碑がある。しかし、これらは、その後の六齋念仏講の存在と展開について明確にし得ない。そして、現今の民俗の伝承からも明らかにしがたい（このことは各村落の古老が受け継いでいないことを示すとともに、古老の一代乃至二代前に消滅してしまったことを示唆しているといえる）。

しかし、すでに触れたように、今日まで受け継がれてきた六齋念仏講の存在と展開によって、すでに絶えてしまった六齋念仏講の変遷を、大きな過ちなく想定し得るといえるであろう。

したがって、大和に現存する数多くの六齋念仏講は、早い時期として1400年代後半、遅い時期として1500年代後半にはすでに存在し、村落間において六齋念仏講同志の交渉があったことも④⑤⑥の「居念仏人」「夜念仏人」や④の各村落の合同供養の実態によって窺うことができる。

このことは、大和の六齋念仏の歴史的な特色といい得るか、否かはさだかでないが、大和の六齋念仏および念仏講の実態であろうと考えている。

註① 土井実『奈良県金石文集成』所収（以下、本文の金石文の挙列は同『集成』によるので、註を略す）

② すでに消滅した六齋念仏講衆が所持していた叩き鉦の外縁に彫り込まれた刻文の一例を示したにすぎない。この地域には、六齋念仏講以外にも双盤念仏や百万遍念仏（ジュズクリあるいはズズクリと呼ばれている）の用具が現存している。

③ 現存する乙田の六齋念仏講衆が所持する叩き鉦に彫られた刻文の一例を示したにすぎないが、他にも年銘を彫り込んだものがあるといわれているが、実見していないので明白ではない。しかし、

昭和54・5年頃に生駒民俗会（今井正弘氏代表）で調査されている。

④～⑤ 『民間念仏信仰研究資料集』第一集〔仏教大学、文部省科学研究費による総合研究〕所収。

⑥ 桜井市栢森の古老（福田優氏からの聞き取り調査による）。

⑦ このつば書きの「表紙」には

明治廿五辰七月再写

六齋念佛誦後進資助鏡集

川  
辻野浅五郎

と記載されている。

### 結びにかえて

大和の六齋念仏および念仏講を中心に、盆行事とのかかわりの中で考えてきたが、民俗事例をみるかぎり、大和の六齋念仏および念仏講は大きく二系統に分けることができる。そして、すでに触れた民俗事例や金石文などの資・史料をもとに作成した付図からもわかるように、便宜上呼称した「佐紀六齋念仏」系統の六齋念仏が奈良市北部から中央部に集中し、奈良盆地の中南部には所謂「東佐味六齋念仏」系統が点在していたことを知る。ただ、金石文によって六齋念仏講衆の存在を窺い得る地域の六齋念仏がいずれの系統のものかは明らかではないため、奈良盆地中南部の六齋念仏を「東佐味六齋念仏」系統のものと断定しがたいところである。しかし、概ね鉦念仏を主とする「東佐味」系と考えられるのではないかと想定し得る。

このことはともかく、太鼓念仏と鉦念仏による六齋念仏である「佐紀」系は、奈良北部と隣接する南山城の六齋念仏と酷似していることから、京都系六齋念仏と呼称されている六齋念仏の文化圏が大和の北部にまで達していたと考えられなくはない。

たとえば、京都府相楽郡木津町の木津東の六齋念仏や同郡加茂町の仏生寺の六齋念仏は、奈良市佐紀や秋篠などの地域にみる六齋念仏の講衆の所持する念仏太鼓と念仏鉦と酷似していることが理解し得るのである（木津東六齋念仏の存在については、植木行宣「木津東の六齋念仏」〔京都府教育委員会『仏舞その他—京都府民俗芸能調査報告書一』所収〕により、仏生寺六齋念仏については昭和58年に実見している）。

このように大和の六齋念仏には、所謂〈京都系〉と〈高野系〉との二系統の六齋念仏が共存していたと考えられる。そして、この六齋念仏が中世後半には、すでに大和の村落に定着して、村落間の講衆の交渉もあったといえる。だが、大和の村落に定着した時期が、すでに触れたように、1400年代前半に求めることができるのか、この時期より遡り得るのかは、ここでは明らかにし得なかった。ただ、次の金石文の刻文は、1400年代以前に遡り得ることを示唆するであろう。すなわち、奈良市五条町（応量坊）の六字名号碑に「弘治二年丙辰六月一日五条六齋中」という刻文があり、1300年代に六齋念仏の発生を想定し得る。ここにも六齋念仏の発生に関する課題が内在していることを提示して結びにかえたい。

(1985. 2. 11)

# 村落の共同祈願祭における 模擬用具について

大 宮 守 人

## はじめに

県内の村落における祭祀組織（宮座）によって受け継がれて来た予祝祭や収穫祭の中で見られる祭祀関係の有形物等についても、物質的な視点からの検討を加え、有形物から村落における無形の精神生活の変遷を垣間見る努力が必要である。

多数の有形物が民俗文化財として集積される中で、物事の有形部分と無形部分は表裏一体のものであり両輪の関係にあるという認識のもとに積極的な民俗研究が展開される必要を強く感ずる。

この稿では試みの一つとして予祝祭や収穫祭における模擬用具を取り上げ、今日も受け継がれている農耕儀礼の心に一歩でも近づいて見たいと考える。

### 1. 予祝祭・収穫祭における模擬用具

農具や山林用具を模して作られた祭祀用の仮器もしくは縮小模型的な奉納雛形品を総称して、実用品としての目的・機能を持たないという意味から祭祀用模擬用具と呼ぶことにする。

この模擬用具は、形態上2種類に分けられる。1つは「おんだ祭り」に見られるごとく年頭の予祝儀礼の中で稲作のしぐさを演ずるのに使われる、演技用の小道具的なもので、しぐさとはいえ人間が演ずる関係上、充分な大きさと強度が必要とされる。また祭りごとに使い捨てるのではなく長年使用される場合が多いが、使用されるものには紙垂しでがつけられ神聖な神の道具であることが標示されている。しかし、本来は祭事ごとに使い捨てられるものではないかと想像される。

もう1つの模擬用具は、農具などの縮小模型的なもので雛形品というべきものである。

この雛形品は祭事にあたって神への奉納物として神饌などと共に神前に供えられる品であり、毎回新調されて奉納された後は再度使用されることはなく、神聖・清浄さを重んずる祭祀の古式が認められる。

### 2. 模擬用具を使つての予祝祭

この祭は、初春に神前で農耕の所作を模擬的に演じつつ、様々な目出たごとを述べておくと、そのとおりの結果が秋に実現されるという信仰によるもので、県内では30ヶ所以上

も今なお行われる「おんだ祭り」と「野神祭り」の一部に見られる。

「おんだ祭り」の中で使われる模擬具として最も古い「宝曆」<sup>(註1)</sup>の年号を鍬の柄に残している（年は摩滅して不詳）<sup>(註2)(写真1)</sup>手向山八幡宮の場合を『八幡宮御田植祭謠物』<sup>(註3)</sup>によって示してみると、

手向山八幡宮 御田植祭 謠物

道行 囃子 土拍子

西の山に青い雲のさし出たは

あの地可や この地可や

拝殿所定の座に着き水口祭を行う

〔図略〕小幣、粃種、切餅

（田主、鍬をかたげ出ず）

田主、いかに殿原

アト、さむろう

田主、今日った最上吉日なれば鍬はじめ

セバやと存じ候

アト、目出度う候

田主、打出の小槌

アト、はるかやさよの

田主、打出の小槌

アト、はるかやさよの

田主、打出の小槌

アト、はるかやさよの

田主、打て候へば天下泰平、宝作長久、<sup>(マツ)</sup>

國土安穩、五穀成就、社頭尊嚴、

氏子繁昌と打よせて候

アト、目出度う候

田主、打出の小槌

アト、はるかやさよの

（右三回也）

田主、打て候へばこしき飯<sup>いひ</sup>の香がばッ

として候

アト、目出度う候 アト

田主、打出の小槌

アト、はるかやさよの

（右三田也）\*

\* 田主、打て候へばふる酒の香がはッと  
して候

アト、目出度う候

田主、鍬を止め スキを持出づ、牛ハ田

主の前に進み神前へ

田主、田は打て候へば牛をつ可ひ候

アト、目出度う候

田主、をんじょうが、しょうへのベ々

をり、をんじょうがしょうへのベ々

をり、ぜざいが子にもさもにたりあり

（田主鋤を持ち、牛を追ひ拝殿二回廻る、

牛童二、三回牛の鳴き声を発する也）

（次、ゑぶりを肩に田主神前に出づ）

田主、牛は使ひ候程にゑぶりをつ可ひ候

アト、目出度う候 ゑぶり、正面左右三  
回也

田主、肥桶肩に神前に出づ

田主、ゑぶり八つ可ひ候程に肥をつ可ひ候

アト、目出度う候

田主、肥桶をかつぎ拝殿一周也

田主、福桶左脇に抱え神前に出づ

田主、肥八つ可ひ候程に種をまき候

アト、目出度う候

田主、福の種蒔うよう

アト、福の種蒔うよう

田主、東田へまこうよう

アト、福の種蒔うよう

田主、南田へ蒔うよう

アト、福の種蒔うよう

田主、西田へ蒔うよう

アト、福の種蒔うよう

田主、北田へ蒔うよう	＊ 八百人、合わせて三千二百人の早乙女
アト、福の種蒔うよう	子をしょうじ申て候
田主、川上田へ蒔うよう	アト、目出度う候
アト、福の種まこうよう	(巫女、松苗神前に捧ぐ)
田主、日本国蒔こうよう	田主、唐より渡る節くろの稲ハ
(田主、手鋤肩に神前に一拝殿一周也)	アト、稲三バによね八石
田主、見廻って候へつばめ口になって候	田主、若菖蒲を帯にしたれバ
アト、目出度う候	アト、帯くつろぐ うなじなまめく
(田主、拝殿一周神前ニテ一拝)	田主、大かうじを、ふたつならべて
田主、見廻って候へ取り時になって候	アト、いづれとにやう
早乙女子をしょうじ申して候	田主、顔よしとによ
アト、目出度う候	右當社古傳也
田主、東の國より八百人、西の國より八	手向山八幡宮
百人、南の國より八百人、北の國より＊	宮司 上司延武

というように田主（神主）が台詞を述べて稲作の所作を行い、アト（氏が扮する地謡の人々）が「目出度う候」と答える。能のようなタッチで進められる。また県内の「おんだ祭り」に共通することであるが、演じられる稲作の工程としては田植どまりであり、収穫作業まで行われるところはないのが特色である。

手向山八幡宮では、模擬農具として、鍬・鋤・犁・杵・肥桶形・福桶（種桶）が使われる他、牛面（社家の童児が頭上に乗せ括る）翁面（田主が顔面に着せする）、土拍子（シンバル型の鉄製打ち合わせ楽器で水口祭りの所作で水口をこの音で消める）、鼓（水口祭りの所作の折に打ち、音で消める）が使用される。

肥桶を除くと、模擬用具は実用できる程に丈夫に作られているが、鍬などは、平の歯先部分を墨で塗って表現しており、犁は子供に引かせるためか、やや小振りに作られており、祭祀用の専用器具として製作されていることが窺える。また、それぞれ紙垂が着けられ、神事用の用具であることを示している。

これらのしぐさは、神主が行っているというのではなく、翁面を被り神主が神に変身して水口祭りをを行い、神に奉られた模擬用具を使って神が土地の精霊に豊作を約束させるという見方が本来ではないかと考えられる。だから人々が神に豊作を祈願する姿が「おんだ祭り」のしぐさなのではなく、人々が神の力を頼んで土地の精霊をして秋の稔りを約束させようとするのが古義であろう。

宮中祭祀として行われた祈年祭は、米の古語としてのトシの豊作を神に願う祭りとして行われたのであるが、神にも奉った道具を使って土地の霊力をふるい立たせていただくとするのが本旨であり「おん田祭り」にはその一端がうかがえる。

またこうした予祝儀礼の中に、1度使用した農具は神前に奉ったままにする祭りも1例

だけ県内に見られる。

天理市新泉で5月5日（現在は5月3日に変更されている）に行われる「野神祭り」は〔写真2〕農耕の所作を伴う「野神祭り」として県内では特異な例である。

祭りの当日、朝10時頃に小麦藁で作った牛・馬・ムカデ（水神の化身で龍と同義と考えられる）と若竹で製作した、からすき まくわ犁といっぽぎ耙〔註4〕の模型や御供物を持って一本木さん（素戔鳴神社）へ参り、子供が小麦藁の牛に犁と耙の模型を引かせ、それぞれ3回境内を廻って牛耕の所作をし、続いて馬駆けと称して小麦藁の馬を持って境内を3度走って廻る。最後にはムカデ・牛・馬の他農具模型は神前に供えたままにして引き上げる（昔はムカデは木に巻きつけたという）。神前に供えた供物は、下げて頭屋の家での直会の時に参加した子供達に分けいただく。

この祭りでは、祭祀に使用した用具類は再度使用しないという古式が窺えるとともに、神への奉納物＝神が自ら土地を耕作し地力をふるいたたせるために使用される道具として農具の雛形や牛・馬の他、水霊・地霊の化身と思われるムカデを奉り、田植えを前にして是非必要な降雨と、稲をよく稔らせるための地力の発揚を祈願するための祭りと見ることができよう。祭りのために一行が神社に向う途中、竹筒を道中に何ヶ所も打ち込んで、それに酒を注ぎながら進行する様は、まさに地霊に対する饗応の作法といえる。

### 3. 道具の雛形を奉納する祭り

奈良盆地の中南部の「野神祭り」の他、「山の神祭り」や「亥ノ子祭り」「秋祭り」として行われる祭祀の中には農具や山林用具・剣形などを供える例が見られるが、これには、供えたままにする場合と、奉納した雛形品を分けいただく場合とがある。

前者の例としては、田原本町鍵・同 今里の「蛇巻き」と呼ばれる野神祭りや奈良市別所町・桜井市横柿の「亥子まつり」、東吉野村こくろす小栗栖・同 伊豆尾の「初山の神」、桜井市北山の「秋祭り」などがある。

後者の場合では、桜井市高田の「亥子の暴れまつり」、田原本町矢部の「綱掛け行事」と呼ばれる野神祭りでは、奉納した雛形を持ち帰る。

〔写真3〕矢部の場合は、神に供える鋤・鍬の模型と同じものを参加する家の数だけつくり、後で分配する。神前には、苗三把と鋤・鍬を六ツ目の竹籠に入れて供える。これは、神に供えた物を分けいただくことにより、共にその威力に預るとする信仰によるものである。

〔写真4〕桜井市高田の「亥子」の場合は山口神社の神霊を仮り屋に奉斎するに際して竹の棚（一間四方）を設けその上に仮り屋をのせ、神饌を供えるが、竹棚の周囲には竹とむね合歡木で作った、鍬4・鋤2・犁1・耙1・梯子1・モミサガシ2・三本鍬3・鎌（伏刈）各1・水桶4・おねこ杓1・柄杓（伏刈）各1・鍬（伏刈）各1・横槌（伏刈）各1・木槌1・鉈1・斧1・スリコキ2・包丁2・鍋ツカミ（藁製実物）2・下駄1などの農具・山林用具・日常生活用具の他小銭もさい銭として紙に包んで一面に吊して供えられている。仮り屋の前における拝礼が終ると集った子供等が、竹棚に駆け寄り用具の模型を奪い合う、さらに竹棚も引きたおすなどして破却されてしまうということがある。

この祭りは、もともと旧11月の亥の日に行われ、山口神社の祭神（山の神）を仮屋に迎えて行われた収穫祭であるが、様々な形で子供の暴れが行なわれ、「子供がよく暴れるほど神が喜び来年も豊作である」といわれる中に、神の威力の再生を期待し、冬を越え春には地力・生命力が充実して新たな収穫が秋に得られるようにとの祈願を現わしている。

子供等が持ち帰った道具の雛形は各家の神棚に供えておくが、これは神の分霊をいただく一つの形であろう。

また奉納雛形品を持ち帰らない例として、田原本町鍵と今里「蛇巻き」の例を見てみよう。

かつては、旧暦の5月5日に行われた（現在は6月1日）奈良盆地中南部に見られる「野神祭り」の典型であり、隣接した大字でよく似た型式が比較できる例として貴重である。

この祭りの時期は、麦の収穫を終えると共に、稲作の田植えを直前にひかえた頃であり、麦の収穫祭と、稲作の無事、とりわけ田植に必要な水に恵まれるようにとの祈願を行うのが野神祭りの本旨であろう。

このため、水の神の化身である巨大な蛇体（龍）を稲藁と麦稈で作り、これを担いで1年間に婚礼や出産・家の新築など、大字内で慶事のあった家々を廻って祝福しつつ「農神祭り」への祝儀を集めていく。鍵の集落では、17才から3才までの男子が蛇を担いで練り歩き途中に行き合った人や、後尾の者が前方の仲間を蛇体で巻き込で暴れながら進行する。15～17才の者は頭持ち、14才の者はドサン箱（土産箱）持ち、それ以下のものは蛇の尾を持つことになっている。ここで注意をひくのは土産箱である。二間以上の長い青竹を割り込み、それに、鍬・鋤・鎌・備中鍬・横槌などの農具の雛形をカシの木で作る（頭持ち・ドサン箱持ちの者が作る）、これを折箱に納めて紅白の水引をかけたものを件の青竹に挟みつけて列の先頭を行き、祝儀を集めるべき家へこの青竹をさしかけて祝福する。

神に対する奉納物である農具の雛形に対する賛同の証としての祝儀を集めるのであるが竹の先に挟むというところに奉納の古式を見ることができる。

今日神社に奉られている御幣は御神体のごとく見られたり、神の憑代とも受けとられる場合があるが、本来は神へのお供への形式の一つであり、古くは衣料となる布を棒で挟んで供えたが、後に紙に替ったのが御幣の形である。

鍵のドサン箱は、タテマツリモノを青竹に挟むという点、御幣の古態を見せていて貴重な例である。

ドサン箱の先導によって蛇体は鍵の八坂神社の飛地となっている小字「ツナカケ」という所にあるヨノミの木に頭を下にし、尾を木の上に掛けた形で安置し、ドサン箱も供えておく。

隣りの今里の集落では杵築神社の境内にあるヨノミの木に頭を上にして巻きつけ、鍵の「下り龍」に対して「昇り龍」と称している。

今里ではドサン箱はなく、ヨノミの根元にある祠の中へ鍬・鋤・鎌・備中鍬・耙・犁・槌子・横槌・掛矢・箕を入れて供えておく。1年間供えてから焼却するということである。

## 4. 延喜式に見る雛形奉納

現在の民俗行事の中に見るものがいつから今のように行われたかを確認することは、文字として記録されることが少なかった民間の伝承であることから困難なことであるが、奈良～平安時代にかけての律令制の時代に、宮中祭祀や地方の神々に対して奉る神供・御料について、律令の施行細則を収録した延喜式〔延喜5年(905)～延長5年(927)編集〕には予祝祭としての意味をもつ「<sup>としごいのまつり</sup>祈年祭」の神供・御料として以下のように記されている。<sup>(註6)</sup>

二月祭

祈年祭神三千一百卅二座

神祇官祭神七百卅七座

奠幣案上神三百四座

社一百九十八所

座別<sup>かとりきぬ</sup>繩五尺、五色薄繩各一尺、倭文一尺木綿二兩、麻五兩、庸布一丈四尺、倭文纏刀形、<sup>倭文</sup>繩纏刀形、<sup>繩</sup>布纏刀形<sup>布</sup>各一口、四座置、八座置各一束、楯一枚槍鋒一竿、弓一張、<sup>ゆび</sup>鞞一口、鹿角一隻、<sup>くわ</sup>鋏一口、酒四升、<sup>うなぎ</sup>鰻、<sup>かまぼこ</sup>堅魚各五兩、<sup>ろう</sup>腊二升、海藻、滑海藻、<sup>あまのこ</sup>雜海藻各六兩、<sup>しほ</sup>塩一升、酒<sup>か</sup>柑一口、<sup>こも</sup>裏葉薦五尺

不奠幣案上祈年神四百卅三座

社三百七十五所

座別繩三尺、木綿二兩、麻五兩、四座置八座置各一束、楯一枚、槍鋒一口、庸布一丈四尺、裏葉薦三尺、就<sup>レ</sup>中六十五座各加<sup>二</sup>鋏一口、<sup>レ</sup>鞞一口、<sup>二</sup>卅座各鋏一口、<sup>三</sup>三座各鞞一口、<sup>並見二神名帳一</sup>

前五十八座

座別繩三尺、木綿二兩、麻五兩、四座置八座置各一束、楯一枚、槍鋒一口、裏葉薦三尺、

右神祇官所<sup>レ</sup>祭幣帛一依<sup>二</sup>前件<sup>一</sup>、具<sup>レ</sup>數申<sup>レ</sup>官、三后、皇太子御巫祭神各八座、並奠<sup>二</sup>幣案上<sup>一</sup>、但臨時加減、仍不<sup>レ</sup>入<sup>二</sup>恒數<sup>一</sup>〔中略〕

前<sup>レ</sup>祭十五日、充<sup>二</sup>忌部八人木工一人<sup>一</sup>令<sup>レ</sup>造<sup>二</sup>供神調度<sup>一</sup>

割註 但<sup>レ</sup>鞞者、鞞編氏作、槍木者讚岐国送納、前<sup>レ</sup>祭五日、令<sup>二</sup>木工寮受<sup>レ</sup>之

〔中略〕

と見え、多くの祭神・社に対して幣を奉り官祭を催すことになっていたことが窺える。

幣としての奉り物には、<sup>かとりきぬ</sup>繩(細い上等の絹糸で織られた絹織物である「絹」に対して太い下等の絹糸で織られた布で「アシギヌ」ともいう)や倭文(倭文織という、<sup>たえ</sup>栲・<sup>あさ</sup>麻・<sup>お</sup>芋の布で、<sup>よこいと</sup>緯糸を青・赤などに染め、乱文に織った布)などの衣料の他、倭文纏の刀形・<sup>かとり</sup>繩纏の刀形・<sup>ぬのまき</sup>布纏の刀形(布とは麻などの白布)などの雛形品の他、楯・槍鋒・弓・<sup>ゆび</sup>鞞(矢を入れる器)などの武具や、農具である鋏も奉られることになっていた。

また「祭りの十五日前に、忌部八人・木工一人を充て、供神の調度を造らせる」とある



ことから、各地の祭神に奉る多数の調度等を10人以下の人数で準備することになっており、刀形以外の調度も雛形的な仮器ではなかったかと思われる。また、布の類は棒の先に挟んだ、今日の神社に見る御幣の形をしたものであったろう。

こうして奉られた数々の幣は、祭のあとどの様に扱われたかは不明だが、祭祀用の仮器であるという前提で考えれば、清浄さを第一と考えた1回限りの使用物として朽ちるままに放置されたのではなかったかと考える。

県内の民俗行事に見る模擬用具と、その使われ方についてその一部を見たわけであるが、これは、例に上げた祭りの一部始終ではなく、ごく一部をのぞいている形となっており、民俗行事のとらえ方としては批判を受けると思うが、ここでは祭りの場における物質的な部分の比較検討の試みとして、全体像については省略的に扱い、祭りの形を「供えた物の使われ方」という点に絞って見てみようとしたためである。今後さらに展開させてみたいと考える。

註1 模擬具の福桶(桧製曲物)の底には文政二年十二月吉日とある他、文政元<sup>慶</sup>年初秋上旬神主紀朝臣延興の奥書を有する、『平城八幡宮御田植神夏之圖』と『八幡宮御田式次第書』が社家(上司家)に伝わっている。

註2 手向山八幡宮・手向山神社・手向山八幡神社の3様の呼称がある。

註3 『八幡宮御田式次第書』に含む。

註4 かつては、古墳の上の桧の大木の根元に小さな祠があったが、戦時中、海軍の海知飛行場の建設に伴ない現在の場所へ移転された。

註5 辻本好孝著『和州祭礼記』に詳しい。

註6 古事類苑 神祇部2

#### 田原本町今里「蛇巻き」の模擬農具

箕 4コ	}	A	幅 4.8cm	行 4.7cm	(桧の小枝の又に稲藁のスエを) (8の字形にアミツケしたもの)
		B	幅 3.9cm	行 5.0cm	
		C	幅 3.6cm	行 5.2cm	
		D	幅 4.8cm	行 4.5cm	

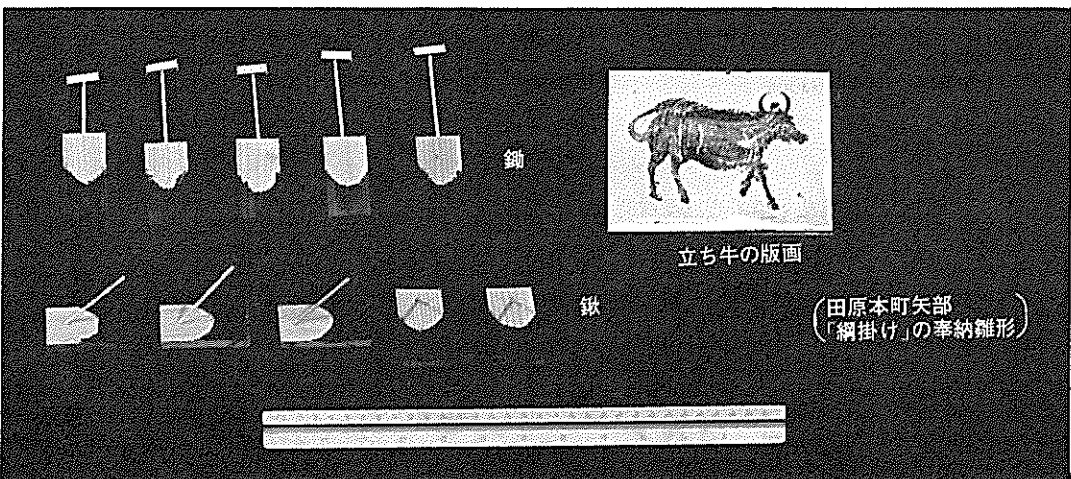
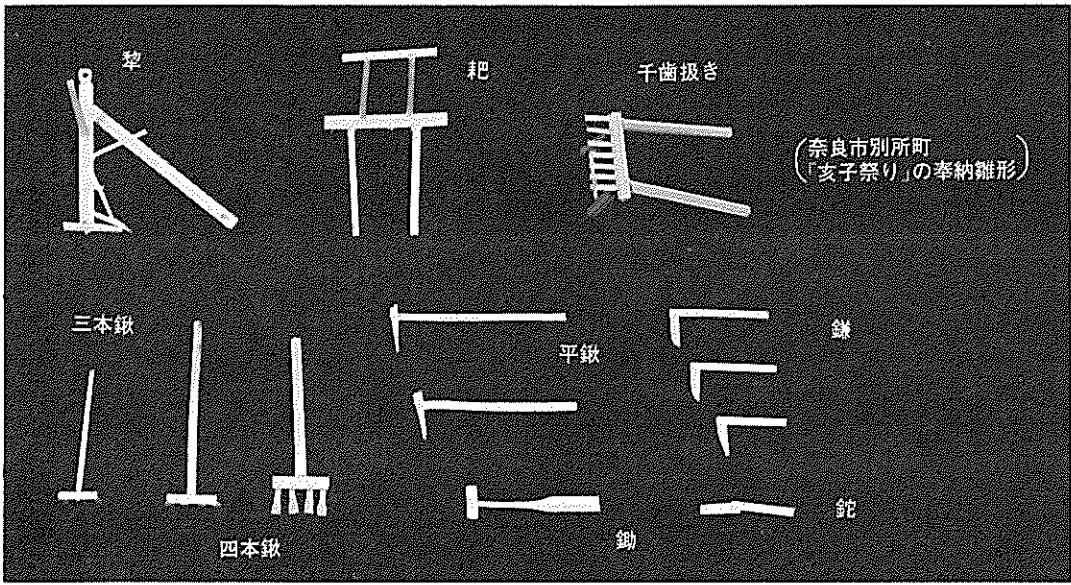
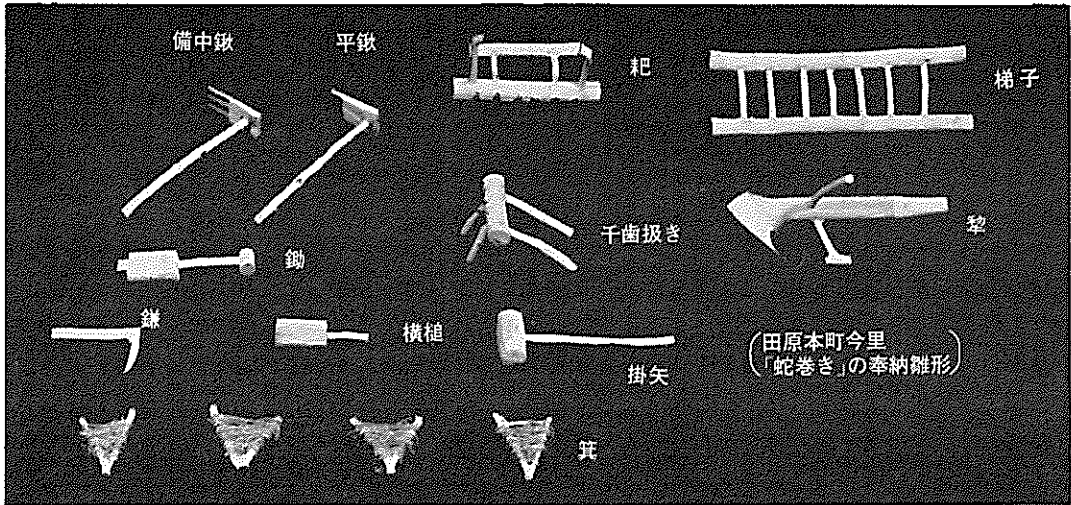
鍬 平幅 2.9cm 厚 0.5cm 高 4.0cm (柄長12cm 先の鉄部は墨書)	犁 全幅 10cm 全長 17cm 全高 6.3cm
備中鍬 平幅 2.7cm 厚 0.45cm 高 4.8cm (先の鉄部は 三本墨書)	千歯コキ 幅 6.1cm 長さ 8.7cm 高さ 4.6cm
掛 矢 先φ 1.9cm 梯子 幅 7.2cm 高 19.9cm 耙 幅 11cm 行き 6.5cm 高 7.8cm	鋤 平幅 2.3cm 平厚 元 0.9cm 末 0.25cm 平高 5.2cm 柄長 5.4cm
	横鉋 φ 2.0cm 全高 6.4cm

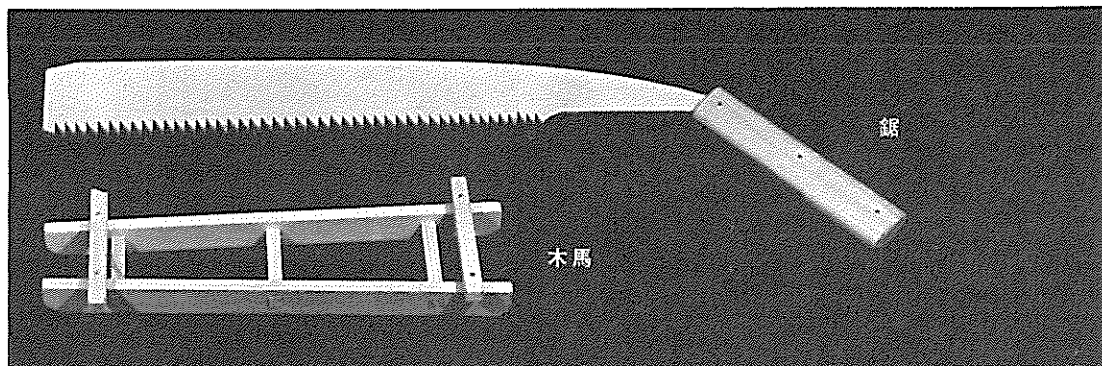
奈良市別所町「亥の子」の農具模型(芋ガラ製)

犁 全幅 7cm 全長 12.6cm 全高 12cm	四本足 (大) 先幅 3.6cm 先高 3.8cm 柄長 11cm
耙 全幅 8.8cm 全長 11cm 全高 8.8cm	四本足 (小) 先幅 3.2cm 先高 2.5cm 柄長 12.8cm
鋤 全長 8.7cm 先幅 1.0cm	鉋 齒長 2.6cm 齒幅 1.2cm 柄長 4.0cm
千 歯 全長 12.4cm 全幅 9.0cm 全高 5.7cm	鎌 (小) 齒長 2.0cm 齒幅 0.7cm 柄長 4.5cm
平 鍬 (大) 平幅 1.2cm 平高 3.2cm 柄長 11.5cm	(中) 齒長 2.15cm 齒幅 0.7cm 柄長 5.2cm
◇ (小) 平幅 1.2cm 平高 3.1cm 柄長 10.3cm	(大) 齒長 2.1cm 齒幅 0.7cm 柄長 6.8cm
備中鍬 先幅 2.5cm 先高 2.3cm 柄長 9.0cm	

田原本町矢部「ノガミまつり」の農具模型(スギ製)

鋤 手幅 3.1cm 厚 0.7cm 高 5.9cm 柄長 4.6~6.7 (先墨書き)	鍬 平幅 3.05cm 厚 0.7cm 高 5.7cm
	柄 柄長 5.8~6.3cm 牛絵馬 14.1×12.2cm

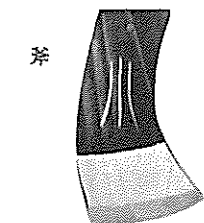




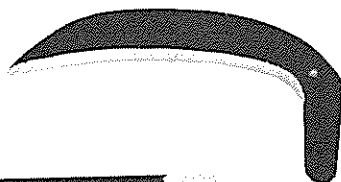
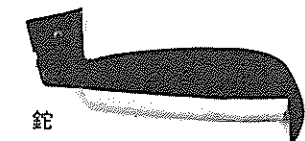
鋸

木馬

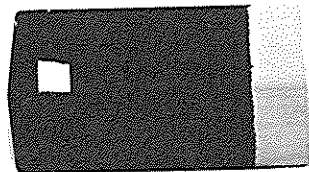
斧



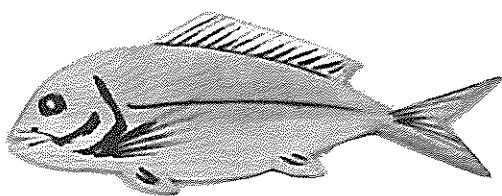
鉈



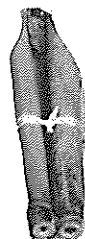
鎌



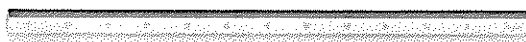
鍬



魚形



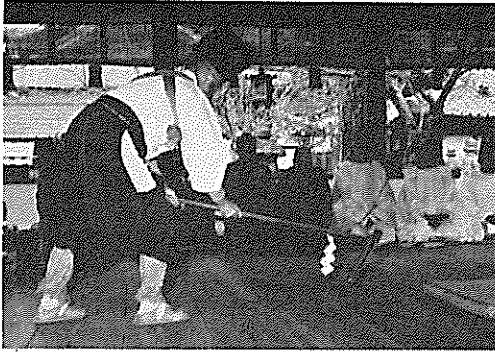
酒入れの竹筒



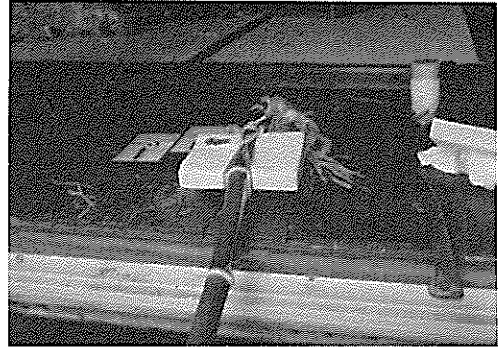
▲東吉野村伊豆尾  
「山の神」への奉納雛形



こぐるす  
東吉野村小栗栖の「山の神」▶  
への奉納雛形



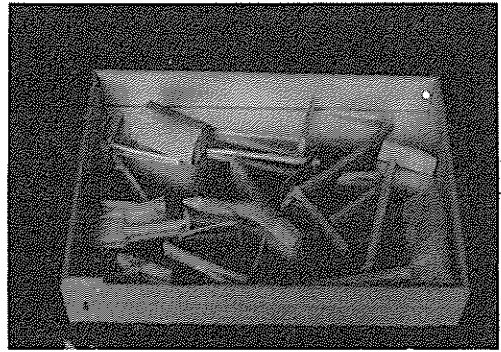
1. 奈良市雑司町手向山八幡宮「おんだ祭」



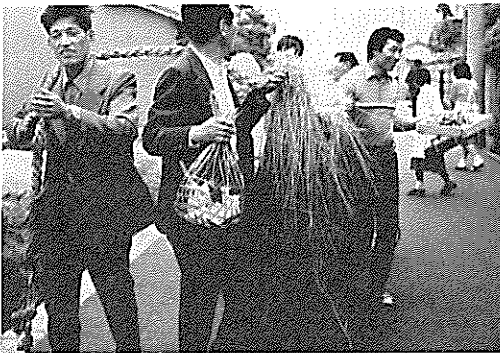
5. 田原本町鏡「蛇巻き」のドサン箱



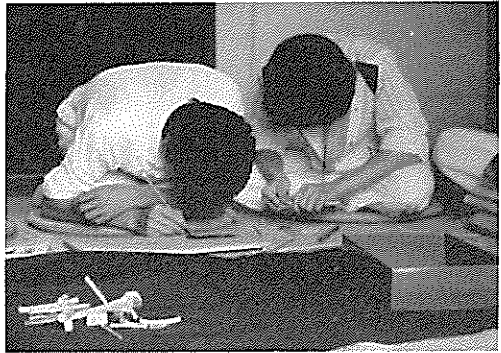
▲ 天理市新泉「野神祭り」



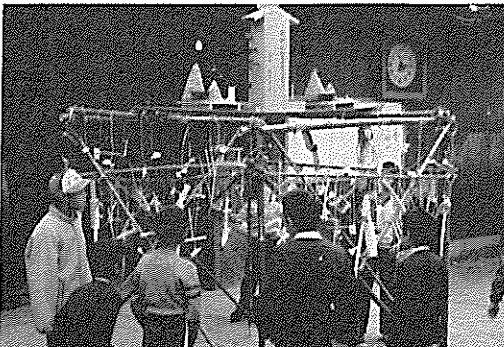
6. 同 上 ドサン箱の中味



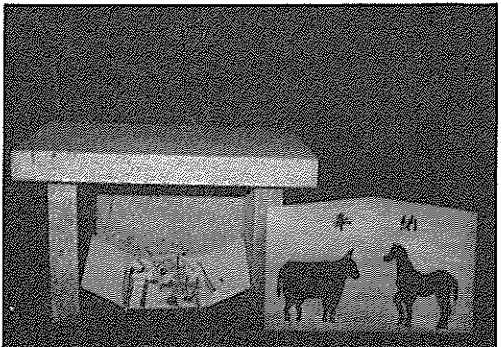
3. 田原本町矢部「綱掛け」



7. 田原本町今里「蛇巻き」の奉納雑形の製作



4. 桜井市高田「亥子の暴れまつり」のお飯屋



8. 同 上 雑形奉納の様子(祠の中に入れる)

# 桜井市上ノ郷の神社成立の過程と祭礼

—「オコナイ」の成立の母体—

浦 西 勉

## はじめに

ここにおいて問題にしようとするのは、一地方における祭礼の成立はどのようなことによるのであろうかという点についてである。村落内においておこなわれる様々の祭礼が、いったいどのようないきさつで成立してゆくのかについて考えてみようとするのである。であるが、ここでは具体的な祭礼を述べるというより、その祭礼が成立する母体となる場に視点をすえて考えを進めてゆこうと思う。この場というのは、多くの場合各村落の神社（村人にとってはミヤサン・ウジガミサンとよんでいる、村落内の神社。多くは神社の社格の村社か無格社）であって、この神社に視点を置いて考えておこうと思う。多くの祭礼は、この村落内の神社を場として営まれる場合が多く、祭礼について考える場合、この神社について十分考えた上で祭礼を見てゆかねばならないと思うのである。

さて、ここでこの問題について考えようとする地域は、桜井市上ノ郷である。そして、その祭礼とは「オコナイ」という祭礼である。この桜井市上ノ郷は、初瀬川の最上流であって11の村落があり、またこの地には古風な伝承が残っていると考え、この問題を考える上で良好の地域だと思っている。

さて、この上ノ郷地区には、略地図(末尾)にあげた13ヶ所の神社が存在する。その内、ここでとりあげる神社は、瀧蔵神社と高齋神社（九頭大明神）についてであるため、直接天満神社や春日神社は今回は触れないことになるであろう。だから、上ノ郷の直接の問題となる村落をあげると、滝倉、芹井、北白木、白木、萱森、和田、中谷の7つの村落となってくる。また、その他の上ノ郷の村落の内笠、小夫、三谷などの関連するところが少しあるので触れることになろうかと思う。

### (1) 上ノ郷の神社についての考察

#### ① 大字滝倉の瀧蔵神社の成立に関する考察

まず、この地に存在する神社で一番古いと考えられる滝倉の瀧蔵神社から述べてみようと思う。この滝倉にある瀧蔵神社はかつて瀧蔵権現と言われており、長谷寺の地主神と言われている<sup>①</sup>であるため、長谷寺の成立と同じく古く平安時代までたどれると考えられている。たしかに、平安時代の記録にはこの神の名が出ている。たとえば『今昔物語』（平

安時代末期成立)の巻19第42には

今ハ昔、長谷ノ奥に瀧蔵ト申ス神在マス。

と記されている。

また、『長谷寺密奏記』<sup>⑧</sup>(平安時代中期成立)には、

瀧蔵大菩薩 当山地主也 河上ニ坐シ御ス

とある。その他『長谷寺縁起』や『長谷寺靈験記』(室町時代初期成立)にも、瀧蔵権現の事が記されている。

これらのことから、この瀧蔵という神の存在は平安時代から中世期にすでに存在していたと見ることができる。ではあるが、これらの記載が即今日の、大字滝倉にある瀧蔵神社なのかと言うと、私には少々疑問を持っているのである。明確に、平安時代から大字滝倉の地に瀧蔵権現があったとは言いがたいと思うのである。それは次のような記事によるのである。『長谷寺縁起文』<sup>⑨</sup>をみると次のように、瀧蔵権現には記載されているのである。

此の豊山に、二名あり。一は泊瀬寺。又は、本長谷寺と言う。二は長谷寺。又は後長谷寺と言う。其の差別は、十一面堂の西に谷有り。其れより西、岡上に三重塔并石室仏像等有り。是泊瀬寺なり。なずけば泊瀬河上。瀧蔵権現、其の所勝地に坐す。往古以来、諸天影向砌なり。(本文漢文)

とある。この文を読むかぎり、この瀧蔵権現は今の長谷寺の西の岡の奥にあったような記載のように思われる。また、もう一例であるが『長谷寺靈験記』<sup>⑩</sup>の中の第11話には次のような下りがある。それは、瀧蔵権現と天神との会話が、長谷寺の境内で行われているのである。その中に

瀧蔵権現答テ云ク。我レ昔ヨリ此ノ山ノ地主トシテ此ノ河上に住キ。此所ハ佛法相應ノ地。(中略)願ハ此山ヲ以テ君天満天神ニユヅリ奉ン。今ヨリ後チハ。永ク此山ノ地主トシテ伽藍ヲ守リタマヘト仰ラレケレハ。天神カサネテ尋ネ申サレケルハ。我レ此ノ山ニ住セハ何レノ處ニカ住ム可キ。瀧蔵権現指ヲ以テ。遙ニ東ノ山ニ大ナル松ノ有ケル所ヲ指テ。彼ノ松ノ本ハ因曼荼羅ノ峰トシテ。断悪修善ニ興喜地ナリ。彼ノ所ニ住シ給フヘシト仰セラレケレハ。天神即チ雲ニ乗シ。俄ニ雷神ト成テ虚空ニ鳴リ登テ。彼ノ松ノ本ニ至リ給ヒ。権現ノ言フ断悪修善ニヨキ地ト云ヲ以テ。彼ノ社ヲハ興喜ノ大明神ト名付ケ奉リ。

とある。この、神の会話をつぶさにみると、瀧蔵が、この山を天神にゆづり、のち自分のかわりにこの地主として伽藍を守れと言って東の山を指さして、あの松の本に住めと命じているのである。今日の大字滝倉の地での会話であるとすれば、東は長谷寺とは全くちがう地である。むしろ、この説話の瀧蔵権現の位置は、今の長谷寺の西ぐらい、つまり本長谷寺の位置から東を指したと解した方が良い。その地から東は、ちょうど今、興喜山天神があるのである。もう一つ、先に紹介した『長谷寺密奏記』の記載の

瀧蔵大菩薩 当山地主也 河上ニ坐シ御ス

は、この「河上」は単純に、長谷寺の前の初瀬川の上流という意味に思われがちであるがそのような意味とのみ考えてよいのであろうか、私にとってははなはだ疑問なのである。

「河上」はむしろ、長谷寺の西方の村落の「白河」などというがごとき、長谷寺の中央に山の谷から流れる「河」を想定してもよいのであって、むしろ、この方が自然の解釈と思のである。

このように見てくると、瀧蔵権現は、長谷寺の地主神と考えられていたことは事実であるが、その居た場所が、即今の大字滝倉の地であるということは言えないように思うのである。むしろ、平安時代の長谷寺の成立ごろの瀧蔵権現は、長谷寺境内地と考えた方がよいように思うのである。実際、長谷寺の境内の小字を調べてみると、タキノクラ（タキクラ）はないが、タクラ、タキノオク、タキノタニ、タキノカワなどがありこの考え方もあながち否定はできないであろう。今の初瀬の町を流れる川はすこぶる岩が多く、しかも川の流れも早い。タキノクラという名が（川が早く流れるタキと岩場というクラとがくつつく）できて不思議でないのである。これに対して大字滝倉の場合は、岩は沢山あっても、滝が全く見あたらないのである。

さて、今ここでは大字滝倉にある瀧蔵神社の成立がいつであるのかを見ようとしているのであるが、上記で考えてみたように、平安時代の文献に瀧蔵と出ているからといって、すぐに、今の地の成立と考えるのは早計であるということを述べているのである。

今、長谷寺の境内、本堂の東北の高台に三社権現があり、その中央に瀧蔵権現を祀っている。この地も少しかわっているのかも知れないが、むしろこちらの方が時代的に古く、本家の瀧蔵権現であるのではなからうか。江戸時代に成立した『和州豊山長谷寺古今雑録』<sup>⑧</sup>の中に次のことが記されている。

當山之三社は初瀬はかりの氏神にても無し之、上ノ郷、下ノ郷、南ノ郷とて、近郷の鎮守氏神也

とあるところから、この記載からは古い時代にかなり広範囲に鎮守として祀られていた、そのなごりであろうと考えるのである。つまり、近郷においての最初の鎮守であったと思うのである。

ここでは瀧蔵権現の在った位置をせんさくしているのではなく、大字滝倉の瀧蔵神社は、平安時代の記録があるからといって早計にそれを信じて良いのかどうかを言いたかったのである。では、以上私の考えてみたように、大字滝倉の瀧蔵神社の成立が平安時代でないとするれば、いつごろ確実に成立したという点が問題である。

古老による伝承では、瀧蔵神社の登り道に六ヶ所の方丈屋敷があり、また観音堂屋敷もあり、明星という権現さんの休んだ場所もあり、それらの屋敷跡に祭礼には欠かきず、御酒を供えるという。つまり、古くはかなりまとまった建物が存在していたという伝承が根強いのである。このような伝承にもとづいて今の滝倉の瀧蔵神社の周囲を見ると、確かに古い遺物が数多く存在することに気がつく。これにより、瀧蔵権現の成立年代を推定して



ゆくてがかりともなろう。その一つに、鐘が存在する。これには次のような銘文がある。

奉鑄瀧藏山鐘

應永廿六年<sup>乙亥</sup> 卯月

十二日

勸進沙門善照

長谷寺小聖

鑄物師右馬四郎

とある。應永26年という西暦1419年で室町時代初期の年号である。また、同じころのものとして、瀧藏権現画像が存在し、

應永十一<sup>甲申</sup> 九月十六日

と銘文がはっきりしている。西暦1404年である。その他、年号が明確ではないが次のような中世の石塔、石仏が存在している。

- ① 神社の鳥居の南に「金剛界四方仏梵字」の石が存在し十三重の石塔の残欠と言われその推定年代は鎌倉後期（『桜井市史』）とされている。
- ② 同じく、上の石の下方に「弥勒石仏」があり、南北朝時代前期と推定されている。
- ③ 瀧藏神社の登り口の鳥居堂にある「阿弥陀如来石仏」があり、これも室町時代初期の作と推定されている。

このように、中世の遺物が点在しているのである。このことは、室町時代初期にはこの地に瀧藏権現が存在したと考えても良いのではなかろうか。この室町時代初期というのは、先に示した文献の『長谷寺靈験記』の成立のころで、先に引用したところの、瀧藏権現が天神に長谷寺の地主神をゆずり、移った頃であり何らかの関連があったのかもしれない。

以上のことから、私はこの大字滝倉に存在する瀧藏神社は、本来（古く平安時代）は今の長谷寺の境内に存在していたものが、室町時代の初期（15世紀～16世紀頃）分社されたのではなかろうかと考えるのである。このことはあとで述べる祭礼についても関連があるので再びふれることになる。

なお、この瀧藏神社の分社には、芹井の神社と笠の神社の摂社がある。これらは、滝倉の瀧藏神社から分かれたものであろうと思う。

## ② 九頭大明神について

上ノ郷の村落の11ヶ大字の内、九頭大明神が、各村落の神社になっている場合が多い。今は高籠神社という名になっているが、明治以前の名称はすべて九頭大明神となっているのである。九頭大明神を神社としている村落名をあげると、萱森、中谷、北白木、白木、和田であり、三谷、小夫は摂社としてあつかわれている。この九頭大明神についてかつて「博物館だより通巻33号」に書いたことがあるので、ここでは必要な点のみを中心に、する記ことにする。まずこの九頭大明神の性格を考えておくことにする。

最初に少し考えて指摘しておきたいことは、上ノ郷の地主の神が瀧藏権現だとすれば何

も九頭大明神を氏神にせずとも良さそうであるのに、どのようないきさつがあったのであろうか。この九頭大明神とはいかなる神なのであろうか。

この九頭大明神に関して、池田源太先生が奈良県下にこの神の信仰が広まっていることを問題にして論じられている。<sup>⑩</sup>この中で、この九頭大明神の神を次の二つの種類の存在を指摘されておられる。

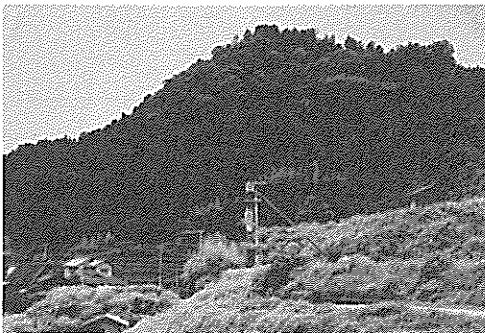
1つは、『延喜式神名帳』の中に「気吹雷響雷吉野国栖御魂神社二座」の名称によるもの。

2つは「九頭竜」の略からという二種類の九頭神を紹介しておられる。

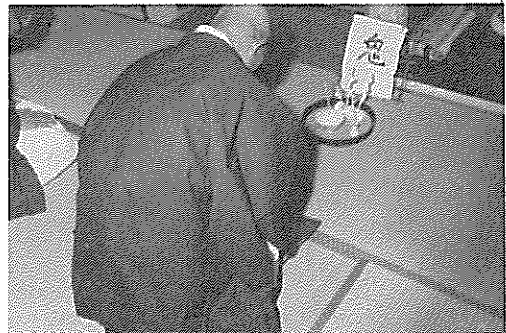
この、上ノ郷の場合の九頭大明神はどうであろうか。私は、池田先生の説の後者の意味の九頭大明神であろうと考える。少しとっぴな考え方もかもしれないが、私は曼荼羅の中にある水天と関係があるのではなかろうかと思っている。というのは、水天は、金剛界、胎藏界の両部の曼荼羅や、諸種の曼荼羅の中の西方守護の龍王として位置しているのである。たとえば、胎藏界曼荼羅に於ては、外金剛部院の四門の北側に位置し、その身は赤色で、頭上に七龍頭ある。その左は水天后であり、頭上に九龍頭ある。九頭大明神は、この水天と関係あるのではなかろうかと思う。また、水天に関して『止風雨法記』<sup>⑪</sup>に次のように記されている。この作法をする時の曼荼羅の図がらが記されており、それによると

西方七頭龍。北方九頭龍王。中央一頭龍王。(以下略)

とあり、九頭大明神との関係を考えさせるのである。このように見てくると、この九頭大明神は水との関係をみることができ。奈良盆地から見れば、長谷寺の奥、初瀬川の上流はやはり水源地であって、この地に水の神として、九頭大明神を祀られたという考えも成り立つと思う。だれが祀ったのかといえば、長谷寺が近世に真言宗になってからの、曼荼羅の水天も十分知っていた僧侶達のように考える。これらの九頭大明神を考える時この長谷寺が近世に真言宗となったことと大きく関係していることを指摘しておきたいのである。つまり、結論から申せば、上ノ郷の九頭大明神は近世以降に成立したのではなかろうかと思うのである。このことは、それぞれの九頭大明神において最も古い遺物をさがしても近世以降のものしかみあたらず、その古い銘文は別表①に示した通りである。すべて近世の銘文の持つものであり、一番古くて和田の九頭大明神の1651年で続いて、1679年・1687年



▲大宇滝倉のオコナイ(ケイチンの行事)



▲大宇滝倉の瀧藏神社遠景

・1744年・1749年・1836年である。ほぼ17世紀後半から18世紀にかけて成立していったのではないかと想像できる。このことは、近世になって長谷寺は真言宗となり、曼荼羅の知識と結びつけて、この地の水があつまる、あるいは水源地に九頭大明神を祀っていったのではなかろうかと思うのである。

(2) 上ノ郷の祭礼「オコナイ」の成立と母体

さて、(1)において祭礼を行う場としての神社について、その成立やその性格などについて考察してきた。このことを土台にして、ここでは、これらの神社で行う共通の祭礼について、どのような関係を見ることができているのかを考えてゆこうと思う。ここであつかう共通の祭礼とは正月ごろ行われる「オコナイ」という祭礼をとりあげてみてゆきたいと思っている。この祭礼について考えたいがために(1)において、大字における神社の成立をみてきたのであるが、それがおのずから祭礼（「オコナイ」）の成立や浸透過程を想像できる部分もあったであろうと思う。

さて、祭礼（以下ここでとりあげる「オコナイ」の祭礼を言う）について考えてゆこうとするのであるが、上ノ郷村の萱森、中谷、和田、白木、北白木、滝倉、芹井、三谷などを中心と考えてゆくので、他の大字笠、小夫などについては、少し複雑になりすぎるため、ここでは必要なこと以外は触れないことにする（この笠、小夫についても重要な問題があるが別の機会に述べようと思う）。

さて、これらの大字の「オコナイ」の行事に関して、検討してゆくことにするのであるが、今日、この地で確認される「オコナイ」行事は、滝倉、萱森、和田、北白木、白木、三谷である。また記録によって芹井で行われていたことが知り得る。「オコナイ」行事はすべて、(1)にあげた村落の神社の境内で営まれているのである。日を示すと次の通りである。

村落名	行 事 の 日	行 事 名
滝 倉	2月1日～15日	オコナイ、正月当、ケイチンなど
萱 森	2月12日	オンダ、ゴーサン、カンジョツリなど
和 田	2月23日	オコナイ
白 木	1月14日	弓打のオコナイ
北白木	2月2日	カンジョカケ、オコナイ
三 谷	1月7日	オンダ、ゴーサン
芹 井	(弘化二年の記録)1月7日	七日座

さて、私の考えの結論を出す前に、これらの村落の「オコナイ」行事の内容について紹介しておこうと思う。その前に「オコナイ」行事の内容について、一応次のような定義をしておく。1月か2月（時には3月）に村人達が神社境内の会所（宮寺）に集まって、僧侶が導師となり、神名帳と経を読み、村人は花餅を供え、乱声、弓打ち、おん田、カンジョカケなどの行事を行う。そして最後は半王室印の札を発行し、これが五穀豊饒の祈願の

札となる。以上に説明した「オコナイ」行事の一部でも行事内容が含まれておれば「オコナイ」行事の範疇に入れる。上記の表は、この考えにもとづく。

#### 白木のオコナイ

1月14日弓打ちのおこない(行事)がある。桜の弓にすすだけ7本つくり、天地東北を打ち終わりに鬼うちをする。これは一老がする。北白木は昔は僧侶が行った。これを行った安楽寺は北白木にも中白木にもある。

#### 和田のオコナイ

2月23日午後にオコナイをする。ネコ柳、柳、藁、玄米、牛玉さん(白紙に牛玉宝印の朱印を押したもの)を用意して作るのだ。またこの時し縄も作る。できあがると頭屋へ集まって夕食のチソウを受ける。そして、ゴーサンは翌日各戸に配布する。もとはこのゴーサンは、神官でなく長谷寺普門院の僧にきてもらって営んだ。

#### 萱森のオコナイ

1月12日にオンダ祭をする。この日、弓打ちのオコナイをする。またゴーサン(牛玉宝印)もこの日に作る。行事は神社境内で行う。

#### 三谷の「オコナイ」

御田祭で2月11日。春まつりともいう。昔は山の口座(8人)と当屋座(12人)の2組があった。今は四組に分れている。座の内で男子が生まれると座の人たちを招待する。

カンジョカケ 毎年2月11日に神縄に垂れ三つをつける。

#### 芹井のオコナイ

今はなされていないが、「弘化二年、御頭屋改帳、正月吉日、芹井村」の中に、正月六日の座の集まりがあると書かれている。その中に「オコナイ」行事の内容と思える記載が見うけられる。たとえば供え物の中に「御ごく先に粟壺うす、きゅう(注・きひょうとはシデの木の枝に小餅をつけた餅花のこと)」とある。また「百枚の内きひょう、ごさん(牛玉さん)に壺枚づつ付」とあったりする。きひょうやごさんは「オコナイ」行事にも存在するものであって、ここでも行われていたことがわかる。

ここに挙げた「オコナイ」行事をする村落の神社は、すべて九頭大明神の境内においてである。(1)でこの九頭大明神の成立は近世になってからであると述べたが、私の考える結論も祭礼としての「オコナイ」の成立もほぼ神社の成立と同時ぐらいであろうと考える。なぜ神社が必要なのかと言えば、祭礼をするためなのである。

これに対して滝倉の「オコナイ」は上記の村落の「オコナイ」に比しての行事の密度が大変濃いように思う。次に滝倉の「オコナイ」について紹介する。

行事は、2月1日から15日まで行われる。2月1日から7日までと9日に、上六人衆と行司の7名が、瀧蔵神社の拝殿にて般若心経を三巻づつ三度繰り返し唱える。一老が磬を、二老から六老までは錫杖を、その内一人が法螺貝を吹く。行同は太鼓を打つ。般若心経三巻終わるたびに、これらのものをならす。2月1日から7日までの間で、特に6日と7日

が村人や宮座の全員が加わって、大きな行事（祭礼の一部）となる。6日は宮座のもの全員が集会所（もと神宮寺）に集合して、7日のオトウワタシの準備にかかる。昼食を集会所で合同で食べ終わってから、上六人衆と行司は拝殿にゆき、ゴーすり（ゴーさんつくり）とハナカズラを作る。集会所に残った人達は、千本杵による餅つきをする。餅つきは七臼と定っており、そのうち四臼目はモチバナとカラスのモチを作りその他はオシモチを作る。

7日は、オトウワタシと言って前年座入した家に1年間あずかっていた権現屋形を、神社拝殿前に運び、前日の6日に作った餅を供え、ハナカズラを飾る。このように飾り立ててから般若心経を唱え、終わると餅の分配がある。続いてオトウワタシがある。オトウワタシは前年の当屋から受け当屋に当屋の牛玉杖を渡すことである。この時の受け当屋が来年の正月当屋を営む。

2月13日、神社の拝殿に祀ってあった権現屋形が、受け当屋の家へ運ばれオシメ（<sup>し</sup>縄）を張る。これをオシメイリと言う。2月14日は座入りの儀式で、受け当屋の家で座入りの披露をする。15日は行司の家でケイチンと言って鬼と書いた紙（まと）に一老が弓で打つ行事を行う。

以上が、この滝倉の「オコナイ」行事であって、一老から六老と行司役は2月1日から15日間、常にこの「オコナイ」行事をやっていないといけないのである。また、上記の「オコナイ」の日時の別表②の右の行事内容は「オコナイ」、の行事内容がほぼすべてにわたっていることが理解できよう。

行事期間が1日から15日までと言うのは、内容は別として東大寺のお水取り（修二会）と肩をならべる程である。大寺院で行われる、完成された修正会、修二会を思わせる。

この「オコナイ」のなされる場所は瀧蔵権現の境内においてである。そしてこの神社の成立が(1)で述べたように室町期であり、そこへ神宮寺も存在するのである。このような背景がととのっていたから、この滝倉の「オコナイ」行事は、衰微しているとはいえ、完成された「オコナイ」の姿をみることができるよう思う。これに対して、その他の村落の「オコナイ」はその成立が近世的であり、むしろ近世以前は芹井、三谷は滝倉の「オコナイ」行事に参加していたのではないかと考えるのである。また、白木、和田、萱森の近世以前は長谷寺の修正会（「オコナイ」）に参加していたのではないかと考える。近世になってから、各村落に神社の成立とともに「オコナイ」行事も浸透していったように思うのである。

では、室町期に成立した大字滝倉の瀧蔵権現の祭礼の「オコナイ」は独自において成立したのかといえ、またそうではないのである。それは、長谷寺との関係によるのであらうと考える。次にそのことを含めてまとめてゆこうと思う。

### (3) 長谷寺の修正会上ノ郷との関係

長谷寺において『豊山玉石集』によれば、正月朔より14日まで修正会が行われるとある。特に今日では14日の結願において鬼が出るダダオシが有名で人々に知られているが、これ

はあくまで最後の日1日の結願の行事であって、修正会は14日間行われていた。『豊山玉石集』<sup>⑧</sup>にあげてある14日間の主要な祭礼を列挙すれば次の通りである。

朔日より14日まで毎日七つ時に修正会を行う。化主六坊各出座 鄭重の法会有 2日、徳上上人影堂法事、僧上及び六坊自身出勤す

3日 浴佛法事

5日 牛玉加持

6日 八つ時本長谷寺法会 天武天皇御願の金銅の釈迦佛を開帳し奉り化衆六坊衆町なる法事あり、堂内に昔より賓頭盧尊者の古像あり。当町並白河村より隔年に紙衣を新に調し着せ奉る。

8日 四つ時開帳

10日 四つ時常憲院御諱日法事同前、化主六坊出座毎月しかり

11日 八時瀧蔵権現拜殿に於て化主六坊法事あり

12日 晨朝 化主興教大師堂へ参詣発露懺悔の文を誦じ法施有り

13日 開帳

14日 四つ時文眼院殿追福法会如前

以上が、この長谷寺の修正会の14日間の法会である。ほとんど寺の内部でやってしまうのであろうが、ここで注意しておきたいことは6日の本長谷寺の法会と11日の瀧蔵権現の法会である。これなどは、修正会の一環であって、しかも長谷寺側と近郷との人々の結びついている祭礼であって、この形態のほうが古風なのではないだろうかと考えている。今はこの二つしか残っていないが、かつてはその他にもあったにちがいないと思う。さて6日のほうは、今は行われなくなったが、俗に「一箱べったり」と言われている行事である。初瀬と白河の両大字の頭仲間が年番交代で、紙衣を着せて、お白粉を一箱べったりと塗る行事である。古くから旧正月5日の真夜中から6日にかけて行われていた。

また、11日には長谷寺境内の三社大権現を初瀬の郷八村の人が出て祀るのである。その八村とは、初瀬町柳、吉隠、角柄、柳原、出雲、萱森、白木、中谷である。今も、嚴重に権現まつりとして行われている。この行事のことは『豊山傳通記』<sup>⑨</sup>(1723年)の上巻によれば、次のごとく記されている。

此権現者。長谷ハ邑ノ鎮守。正月祭レ之。柳原出雲云々下郷。角柄柳村吉隠云々南郷。萱森白木中谷云々上郷。依レ神敷。三郷ニ各々一人勤レ祭祠頭役ヲ。一箇季中齋戒精進。日日詣レ社ニ毎歳正月十一日。氏人皆集テ祭ニ奠メ盛饌ヲ。其修正會ノ儀式嚴重ナリ。

上ノ郷、下ノ郷、南ノ郷が、長谷寺の三社権現を祀る、それを修正会と記されているのである。今日でも、この権現のまつりは、この地域の人々にとって重きをおいているようでそれぞれの大字では、ゴクつきとメ縄作などの役目をうけるのである。この当屋をつとめると長谷寺から「補任状」がわたされるのが定めであったと言う。

以上、長谷寺における正月の修正会の祭礼が旧正月1日から14日まで続けられ、その一部に、この地周辺の上ノ郷、下ノ郷、南郷、白河、そして当然初瀬などの人々が祭礼に大きく関与するのである。むしろ、この長谷寺の修正会の一部に関与することが古く、特に、白河、初瀬の「一箱べったり」とか上ノ郷、下ノ郷、南ノ郷の「三社権現の祭礼」が、少しづつ村の人々の内へ浸透してゆくのであろう。この役目につくことが、その土地での有利な地位につくための関所となったようにも思える。

初めの、瀧蔵権現は本来、長谷寺の中ではなかったかと記したが、このようにみえてくると、ますます本来あったところは長谷寺境内と考えてしまう。

大字滝倉や芹井も、本来この長谷寺の瀧蔵権現に関与していたのであろうが、中世の中頃、室町期ぐらいに、何らかの理由で分離して、大字滝倉に瀧蔵権現がまつられるようになったのではなかろうかと思うのである。しかも、分離しても、長谷寺の修正会とは決して無縁のものでなく、同じような行事がこの地でも続けられることになる。本来、大字滝倉と芹井、三谷あたりはこの瀧蔵権現をまつたのかもしれない。というのは、芹井には修正会の神名帳や法則がのこり、三谷にはオンダなどの行事が残っており、それぞれ、大字滝倉の権現さんの修正会と関与したのではないだろうかと思うのである。

そして、続いて、近世になってこれらの各村々に長谷寺の修正会や大字滝倉の瀧蔵権現の修正会の一部が独立していったのではなかろうか考えるのである。このことは、最初に考えてみたそれぞれの大字の神社の成立と一致してくるのである。

ここで考えてみたことを、整理してみると長谷寺の修正会（オコナイ）が、この近郷にとって大きな存在で、この近郷の人々はこの祭礼の一部分を受けもちつつ、発達してきたのである。それが、近郷の自立が少しずつ進むにつれて、大字滝倉のように、長谷寺の三社権現の中の瀧蔵権現を分けて、この周囲の人々によって長谷寺の修正会（オコナイ）の小型をつとめるようになる。そして、最後には、その修正会（オコナイ）が各大字の神社の成立とともに、各大字で行うようになるというようなストーリーが考え出されるように思うのである。

以上、上ノ郷を例にとり、神社の成立と祭礼（オコナイ）との関連を考えてみたが、考え方が少々あらっぽくて充分意をつくせたかどうか今後より深めて考えてみたい。

- 註① 『桜井市史』神社編の説明など  
 ②・③ 『大日本仏教全書』所収  
 ④ 永島福太郎著『豊山前史』所収  
 ⑤ 『豊山全書』所収  
 ⑥ 池田源太著『古代日本文化論考』所収  
 ⑦ 『続群書類従』第25輯下所収  
 ⑧ 『豊山玉石集』所収  
 ⑨ 『大日本仏教全書』所収

表 ①

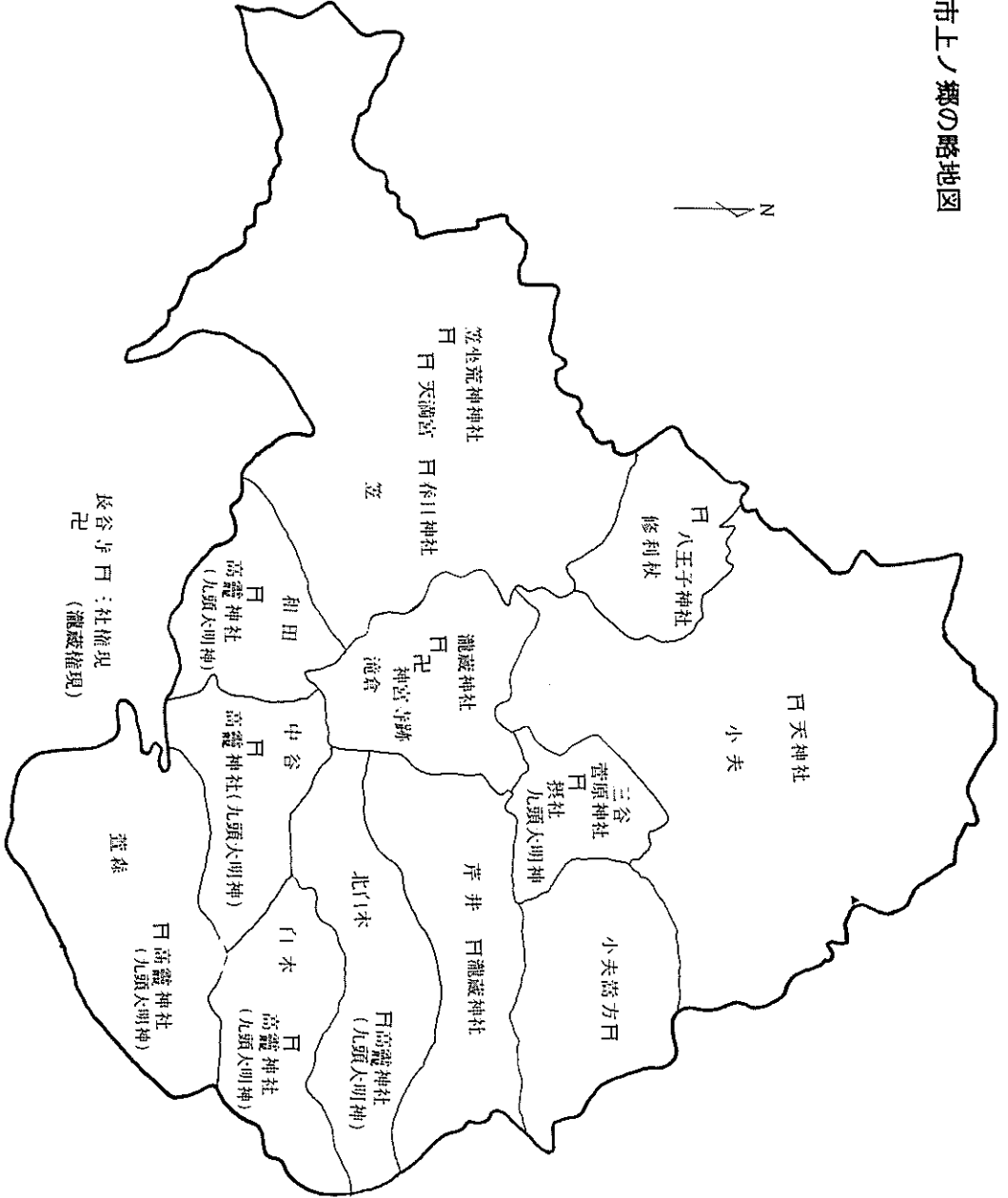
大字名	神社名	金 石 文
萱 森	高籠神社	九頭大明神／奉造立石燈籠建立／貞享四「卯天／霜月大吉日／式上郡萱森 (1687)
萱森 口ノ倉	九頭神社	九頭大明神／寶曆八寅十二月吉日／氏子中(1758)
中 谷	高籠神社	九頭大明神／文政七甲申年八月吉日／願主当村要八 (1836)
北白木	高籠神社	九頭社／享保十七年八月吉日／北白木村甚次郎／東白九頭大明神／延宝七年末二月吉日 (1679)
中白木	高籠神社	九頭大明神／延享五戌辰年二月吉祥日 (1749)
三 谷	菅原神社	九頭大明神／宝曆九年 (1759) 九頭大明神／延享元年 (1744)
和 田	高籠神社	九頭大明神／慶安四年 (1651)

表 ②

村落名	場 所	行 事 内 容						
		牛玉つくり	カンジョ	弓 打 ち	花 餅	オ ン ダ	神 名 帳	乱 声
滝 倉	瀧藏神社	○	○ オシメイリ	○ ケイチン	○ モチバナ			○
萱 森	高籠神社	○	○	○		○		
和 田	高籠神社	○	○					
白 木	高籠神社			○				
北白木	高籠神社	○	○					
芹 井	瀧藏神社	○ 記録			○ 記録		○ 記録	
三 谷	菅原神社		○			○		



桜井市上ノ郷の略地図



# 仕事着について

—奈良盆地を中心に—

徳田陽子

## はじめに

当館には、仕事着がかなり収蔵されている。それらの仕事着を地域的に生業別、男女別にみていくと、かなりの相違がみられる。例えば、稲作の盛んな奈良盆地の女性はオコシ（腰巻）姿が多いが、林業中心の吉野山地の女性は天川袴などをはくところがあるというように地域による違いをみることができる。

又、仕事着は、上衣と下衣にわかれたツーピース型が多いが、上衣だけをとってみても、体を動かしやすいように、身丈や身ごろの両脇のウマノリや袖の形などに工夫が窺われる。しかし、当館の仕事着の調査は、まだ充分ではない。

かつては、家族の衣類は、一家の主婦が綿の栽培から始めて紺屋で糸を染めハタオリをして布を織る過程を経て、初めて裁縫をしたのであるが、現在は、既製品が多く、安く手に入るようになり、ハタオリはおろか裁縫さえもあまりしなくなった。その上、和服から洋服に変わったので、昭和初期までのような仕事着は次第に失われつつあるのが現状である。特に、バッチのように型紙を使って布を裁つものは、型紙がなくなったらもう作れないということになる場合が多い。

そのため、今のうちに仕事着の調査と収集をしておかなければならないのである。今回は調査の途中経過といった形で、奈良盆地の一部と奈良盆地と交流のあった大和高原の山添村箕輪の事例を報告したいと思う。

### 1. 大和郡山市矢田町山田原の場合

大和郡山市矢田町山田原は、矢田丘陵にある農村である。ここでは、男性は農作業と山の柴刈りを、女性は田畑の仕事で忙しいのでわりにはやく、ハタオリはしなくなり、反物を購入するようになったという。

大正末までは、木綿糸を郡山の本町の糸屋上本で購入した。その木綿糸を紺屋町の奈良屋で染めてもらい、自分の家でハタオリをして、裁縫した。そして、昭和に入ってから、呉服屋で反物を買うようになった。法隆寺の西屋、大阪の上本町、鶴橋などの呉服屋も利用した。

紺無地の反物半反でジバン・バッチを、一反で拾のボッコを作ることができた。並幅の

反物をほとんど直線裁ちしていただけなので、無駄な布があまりでない。

伊予絣でヒッパリを縫ったという。

まず、男性用の仕事着をみていこう。上衣はジバンを着た。紺無地（あるいは縞）の木綿で作った。夏はこれだけである。冬はこの上に綿入れのボッコを着た。春秋の頃は、袷のボッコを着た。下衣は、ほぼ1年中、紺無地の単のバッチをはいた。ジバン・ボッコの上にバッチをはいて紐で結び、ヘコオビをしめた。バッチの足首のところは、藁でくくった。そしてゾウリをはいた。冬の山行きのときは、牛皮のシビグツをはいた。

ジバンは、現在のシャツに近いもので、袖付部分にマチをつけた筒袖で、木綿は吸水性があるので肌着的な役割も果たした。ボッコは上着として着用するので、巻袖にして、袖付をゆったりととって着やすく動きやすいようにした。ボッコの裏地は、古いボッコをほどこいて余り痛んでいない部分を使い、その他は雑巾にしたり、ボロ買いに売ったりした。ボッコは3年ぐらいもったという。

このように仕事着の袖は、巻袖にしたり、マチをつけて筒袖にしたりして、無駄な端切れがでないように作っているのが特徴であるといえよう。

次に女性の仕事着をみていこう。女性の場合は、絣や縞の長着の場合と、上衣と下衣のツーピース型の2通りがあった。特に、冬は白かピンクのネルのオコシの上に筒袖（若い女性は元禄袖）の袷の長着を着ることが多かった。裾が邪魔になるときは、裾まくりをした。筒袖は、並幅のまま袖丈の長さに裁って袖口側の余分の布は裏側に折り込んで前袖に縫い付けた。こうしておく、今度、洗い張りをして仕立て直すときに、袖口の痛んだ部分と袖付の部分を逆にして使うこともできた。

夏は絣の残り布で作った1幅から1幅半の、冬は3幅の前掛をした。仕事をするときには襷をかけた。

エプロンは、大正中頃、浴衣をほどこいて作ったことがあるという。

田植や田の草取りのときは、ツーピース型であった。上衣としては、単のヒッパリを着た。袖は巻袖が多かったが、若い娘の場合、1尺7寸（約56cm（鯨尺））の元禄袖であった。下衣は、絣のオコシをした。オコシをつけた上にヒッパリを着て襷をかけた。ヒッパリの両裾脇にはウマノリをつけて上体の屈伸がしやすいようにしてあった。

頭には手拭を姉さんかぶりにして、手にはテオイ、足には脚絆をつけ、ゾウリをはいた。テオイ・脚絆は、紺無地の残り布を利用した。脚絆はヒルよけである。

戦争中にモンペをはくようになった。都会から疎開してきた人が、防空頭巾にモンペ姿であったのを真似たのがはじまりであった。その頃のモンペは、現在も呉服屋などで売っているモンペとほぼ同型であるが、腰はゴムではなく紐を使った。この頃から、オコシ姿をみかけることが少なくなっていったのである。

女性の仕事着は、絣や縞の色や袖の形を、年令や着る人の好みや流行などに合わせて変化させて作った。そこに、作る人の、着る人に対する心くばりを読みとることができるよ

うに思う。

## 2. 広陵町沢の場合

広陵町沢も農村である。冬は、男は山に柴刈りにいくところが多い。

男性は、上衣は、夏の場合、白か紺無地の木綿のシャツを着た。春秋はその上に単のボッコ、冬は綿入のボッコを着た。下衣は、紺無地のバッチをはき足首は紐で結んだ。バッチの上に紺木綿の三尺帯をした。頭は手拭でほおかぶりをした。夏はゾウリ、冬は藁シビを入れた牛皮のクツをはいた。

女性は、夏は紺緋のヒッパリにオコシをつけた。冬は田畑の仕事はしないので、ドマキの上に長着をきて、ヒッパリを着た。

## 3. 山添村箕輪の場合

山添村箕輪は、県の北東部の大和高原に位置し、茶業の盛んなところである。

男性は、夏はジバン、冬はその上に綿入れのハッピー、春秋は単か袷のハッピーをきた。下衣は1年中単の紺バッチをはいた。バッチのマチはひょうたん型であった。ハッピーの上には一幅の紺無地の帯をしめた。頭には麦藁帽子を夏には日よけにかぶった。手拭は首にかけた。テオイをし、ゾウリをはいた。

女性の場合をみよう。箕輪は、田植えが5月初旬に始まる。「五月女に秋男」と言われるほどに、5月は、この田植時に新しい仕事着をおろして着た女性の姿がきわだって目立つ月であったという。サラシの筒袖のジュバンに紺木綿の腰巻をあて、紺緋の巻袖の膝までの長さのハッピーを着る。この上から、木綿糸を縦糸に、木綿布を細かくさいて横糸にして織った半幅帯をしめ、一幅半（ときには三幅）の前掛をしめて、襷をかけた。袖丈が短かいので実際には襷で袂の始末をする必要はなかったが、おしゃれをするのが目的でしていたという。だから、娘時代は赤い襷で華やかさを競い、結婚するとピンク、赤と白、あるいは赤とピンクの縞柄、4代になると水色、さらに年をとると茶色というように次第に地味な色にかえていった。ハッピーの袖口の裏は7cm程、白木綿の裏地をつけて、袖の表側にまくったが、これも、袖口は痛みやすいからであると同時に、紺と白の対照による変化を求めたのであるという。首に手拭をかけ、首筋が日に焼けないように気をつけたという。頭には手拭で姉さんかぶりをして、暑くなるとその上から検笠をかぶった。手には黒無地



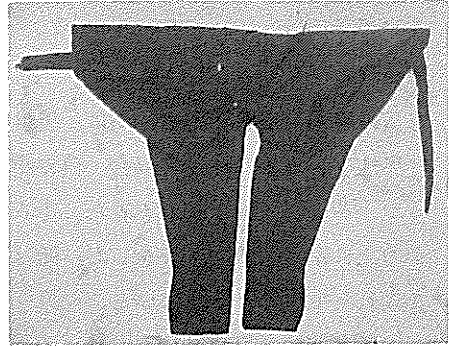
▲ ほおかぶり



▲ 姉さんかぶり



▲モンペ姿



▲紺バッチ

のテオイ、足には黒無地の脚絆をして、ゾウリをはいた。

5月20日頃、茶摘みが始まると、三重県の名張などから摘み子がやってくる。この茶摘みが終わると、1ヶ月遅れの田植の始まる郡山へ田植の手伝いに行く。田植は、手早く、まっすぐに苗を植える技術が必要なので、田植に雇われることは、その技術を持っている人だけなので、夏の草取りなどの3倍ぐらいの日当をもらうことができた。

5月は、女性達にとって、田植、茶摘みと続け様にあって忙しい月であるが、他の地域との交流も、又、盛んな時期であり、楽しみも多い月であった。このことが、仕事着一つをみても実用的な面だけでなく、ちょっとしたアイデアでおしゃれを楽しんでいる様子から推測できる。

#### まとめにかえて

今回の調査は、県下全域からみるとごく一部分に過ぎないが、それを押していえることを2、3記しておくことにする。

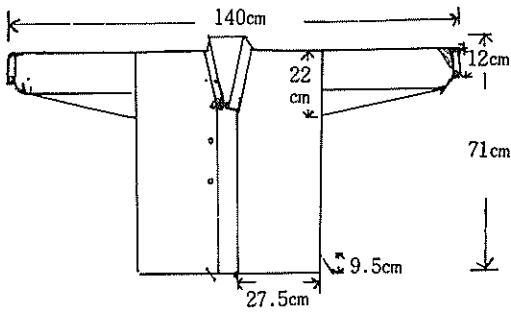
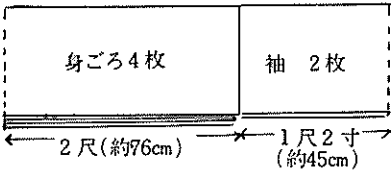
その1つは、男性の仕事着は、ジバン（ジュバン）、ポッコ（ハンチャ）、バッチの形態が多いということである。バッチのマチのとり方は地域によって違うし、足首をコハゼでとめるようになっている脚絆バッチなどもあり、バッチ一つをとっても同じではないので、その辺を重点的に調査していきたい。

次に言えることは、男性の仕事着に比べると、女性の仕事着は、細かいところでは色や柄の変化から、長着、上衣の身丈の長さまで地域によってかなりの相違がみられることである。

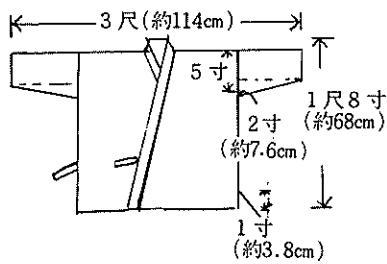
今回事例に挙げた奈良盆地、大和高原のほかに奈良県の半分以上を占める吉野山地がある。ここは林業の盛んなところであり、和歌山県との交流もあるところであり、奈良盆地などは、仕事着もかなり異なるようであるから今後は、これまでの調査を充実させていくと同時に、吉野山地の仕事着を調査して、地域的な特色を明確にしていきたい。

末筆ながら、この小稿を書くにあたって、いろいろご協力いただいた伝承者の方々にお礼申し上げます。

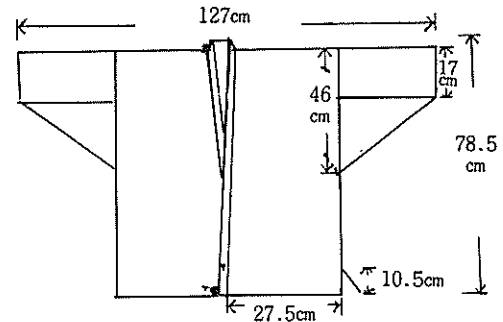
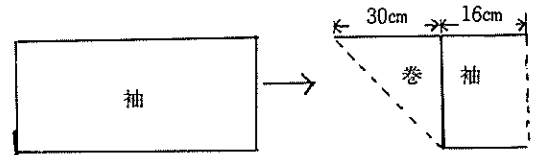
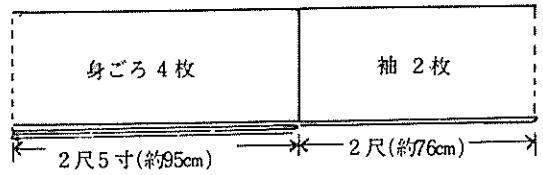
ジバン 大和郡山市矢田町山田原 (鯨尺)



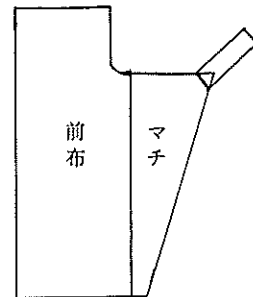
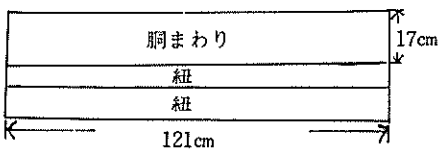
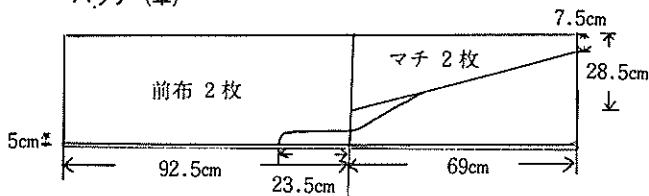
ヒッバリ



ポッコ (単)



バッチ (単)



# 女 性 と 講

—奈良県下の十九夜講を中心に—

横 山 浩 子

## はじめに

奈良県下の多くの村に、女性ばかりが集まって行う講がある。

尼講、観音講、ババ講、十九夜講などといったものが代表的なものであるが、それらは嫁をとり、孫の顔をみた高齢者によって構成されているもの、またその逆に嫁ばかりで行われているものなど、年齢集団的性格を持つものが多い。

ここでは、その中から十九夜講について考えてみたいと思うが、今回は手初めに、奈良県下で現在実際に行われている講の様子、或いは古老からの聴取を報告し、この講の持つ社会的機能と宗教的機能を概観してみたいと思う。

### 1. 十九夜講の概要

十九夜講は素朴な庶民信仰の一つである月待ちの一種と考えることができるが、現在残っている供養塔から、時代的には近世以降に集中している（ちなみに現在のところ最古のものは万治元年（1658）である。<sup>(注1)</sup>

地域的には関東から東北にかけて盛んで、近畿では、奈良・京都に多いという（庚申懇談会編『日本石仏辞典』）。本尊「十九夜様」は如意輪観音とするところが多い。奈良県下の十九夜講について概観してみると、その地域は奈良市東部山間、月ヶ瀬村、山添村、都祁村といった大和高原に集中してみられるのが特徴である。

現在報告されている供養塔（あるいは石仏）は63基余りあるが、それから見ると年号の記されているもので、最古は秋篠寺北門前の享保17年（1732）のものであり、最も多く残っているのが文化年間のものである。<sup>(注2)</sup>  
<sup>(注3)</sup>

このような供養塔があり、かつては講があったと思われる村々の中でも、現在はその伝承が絶えてしまったところも少なくない。

以下、県下で現在行われている十九夜講の様子、また古老から聴取した事例を報告する。

### 2. 奈良県下の十九夜講

#### ①奈良市下狹川町の十九夜講

奈良市東北部に位置する下狹川町は、上手、下手、口城戸、奥城戸、中村、門前の6垣内から成り、十九夜講も垣内ごとに行われている。

下狭川町には7基の十九夜供養塔が残されている。

年 号	形 式	銘 文	所 在 地
天明四年甲辰願主 (1784)	梵 カク	十九夜	中墓寺 箱根山墓地
天明五年二月十九日 (1785)	如意輪観音 半内二壘	十九夜天下和順月日清明	奥城戸垣内 地藏前
天明九己酉年九月十九日 (1789)	文字塔	奉供養十九夜待	中墓寺 箱根山墓地
寛政九丁巳年三月吉日 (1797)	如意輪観音 半肉六壘	十九夜講	下手垣内 公民館前
寛政十戊午年二月吉日 (1798)	梵 ウーン	十九夜供養塔	下手垣内 公民館前
文化三年 寅六月日建立 (1806)	梵 サ	十九夜尊	上手垣内 下
不 祥	梵	十九夜尊	上手垣内 上

このうち中墓寺箱根山墓地にある2基は、もともとここにあったものではなく、少なくとも1基は口城戸垣内にあったものという。

これらの碑から、江戸時代後期にはすでに十九夜講が行われていたことを知るが、現在は口城戸垣内と、上手垣内で行われている。下手垣内では数年前から行われなくなり、その講用具は中墓寺に預けられている。

まず口城戸であるが、講員は現在23人である。この村では嫁をとると、そのすぐ後の十九夜講の日に、姑が嫁を連れ、他の講員に対する手土産なども用意して行く。この日が嫁と姑の講の引き継ぎの日であり、他の講員に対しては嫁の村入りの挨拶をする機会となっているのである。ちなみに、十九夜講を抜けた婦人達は、初孫の顔を見る頃「ババ講」という念仏講に加入することになっている（こちらは奥城戸と一緒にいる）。

さて、講は隔月（偶数月）の19日に行われるが、「炊き当番」2名（輪番制）がその世話にあたる。現在では簡略化されているが、かつては講員の各家に竹筒の枡（1合半）を持って米を集め、またアブラゲ代としてお金（戦前で10銭）を集めてまわった。

講の行われる当日、これで色御飯（かやく御飯）を炊き、冬なら大根や里芋の煮物、夏ならおひたしを作り、そら豆や大豆、キリコなど炒ったものも揃え、コウジ蓋いっぱい並べて供物とした。これらは一日仕事で姑にも手伝ってもらったものだという。

夕刻になると、公民館に集まり、如意輪観音の軸を掛け、供物を供え、炊き当番のうちの一人が導師となって鉦をたたきつつ、まず十九夜和讃を全員で唱える。その後供物を下げて食事を共にしながら夜のふけるまで歓談する。

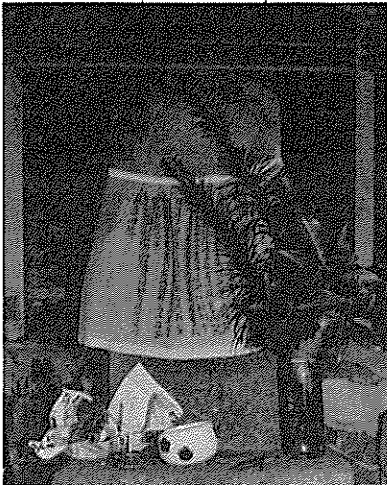
次に上手垣内であるが、ここは垣内の中がさらに上と下10軒づつに分かれている。地元ではこれを「葬式垣内」と呼んでいるが、これを単位として行われるのは葬式の時と、この十九夜講だけである。

講はかつては双方共に行われており、掛軸も残されているが、どちらも一度戦時中に途絶えた。現在行われているのは下の方であるが、これは数年前より、この女性達に病気が続発したため、二年前より復活したものである。幸い戦前十九夜講を行った人がいて、





▲十九夜講供養碑(奈良市下狭川町奥城戸垣内)



▲十九夜講供養碑(奈良市下狭川町上手垣内)



▲十九夜講供養碑(山添村室津)

その頃のお話をうかがうことができた。

今は隔月に公民館で行っている講も、戦前までは毎月19日に行われていた。毎月当番一人(輪番制)がその世話をするが、講はその当番の家で行われた。

当日、当番は家の床の間に掛軸をかけ(この軸をつると家の厄をのがれるといわれている)、供物を用意することは口城戸と同様であるが、十九夜様の碑の方にも供物を供え、講員はまずここに参ってから当番の家集まる。ここでもかつては十九夜和讃を唱えたが今では忘れられてしまって、般若心経を唱えることにしたのだという。

この垣内では、口城戸のように嫁入りしやすく講に入ることはなく、姑の意志にゆだねられており、交替するときにも特に連れ立って行くことはない。

#### ②奈良市和田町の十九夜講

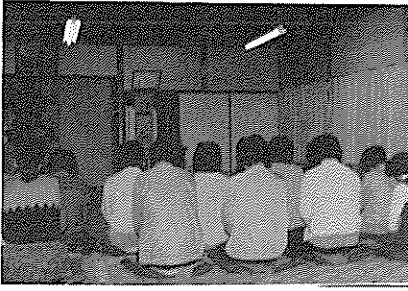
奈良市田原方面でも、十九夜講の供養塔、十九夜様石仏が多く見られる。

現在十九夜講が行われているのは茗荷、横田、南田原、矢田原、和田、中之庄、誓田林また日笠でも近年再興された、とのことである。

和田町で行われているのを見てみると、大要は先に述べた下狭川とかわらない。毎月19日夕刻より会所に集まり、十九夜和讃を唱え、その後食事をする。

ただここでは19回目ごとに「供養」として大野の十輪院にたのんで桧の塔姿(「キャ・カ・ラ・バ・ア」の梵字、奉高顯供養如意輪観世音菩薩十九夜講中家内安全祈攸)の文字を桧の枝を削って墨書し、観音経によって祈祷されたもの)を供える。

ここでも嫁をむかえれば、そのすぐあとの



▲十九夜講(奈良市和田町)



▲如意輪観音と捨塔婆(奈良市和田町)



▲如意輪観音(奈良市和田町)  
子供が生まれるとヨダレ掛けを奉納する

十九夜講で紹介され、以降嫁が姑にかわって講をつとめることは、下狭川町口城戸と同様である。

### 3. 十九夜講の機能

十九夜講(=如意輪観音)についてはお産の守り仏様であり、十九夜講では安産を祈願するのだと一般にとらえられている。

先に述べた奈良市和田町では、講員は、無事出産がすみ、産後75日を過ぎるまで講には出ないが、その後再び講に参加する最初の折に、よだれ掛けを奉納し、また特別に赤飯などを供えることになっている。

山添村室津には文化12年の銘をもつ供養塔があるが、講は、はやく途絶えてしまったものか、軸や和讃帳もなく、古老にたずねても記憶がない。

しかし十九夜様はお産の仏様という伝承だけはかすかに残っていて、昔は妊娠すれば、上述の供養塔にお参りするものだといわれていた。

下狭川町でも安産の仏様として信仰されている。

実は、下狭川には、もう一つの「十九夜様」がある。口城戸の杉本家に代々伝えられてきたものだというが、それは3cm×3cm×10cmほどの、鍛子の裂に包まれた箱型のもので、普段は神棚に置かれて、特に取り出されることもないが、家族の中の妊婦が産気づくと、これを床の間にまつり、カワラケに菜種油を入れた燈明をともし、心経をとなえて祈る。そしてこの油が尽きる頃、無事出産できるという。

燈明が燃えつきるまでに云々、という俗信が添上郡あたりにあることが『日本産育習俗資料集成』の「分晩」の項に見えるが、ここ

では十九夜様と結びついた形で伝承されている。

十九夜様が、子育ての仏様として考えられている所もある。

奈良市須山町では、子供涅槃のとき、十九夜の石塔に飯を塗りつけるという風習がある（『奈良市史・民俗篇』）。

十九夜講を、その宗教的機能という側面から見ると、上述のように出産の無事と、子供のすこやかな成長を祈ることにあることは、その構成員が村の嫁達であることから見て当然の帰結と思われる。

しかし、ここで注目されるのは、十九夜講において唱えられる「十九夜和讃」である。

県下に伝わるこの和讃については、山田熊夫氏が「奈良の十九夜講」（『まつり』第39号）で紹介されている。

十九夜和讃は代々、講員たちが聴き伝えて伝承してきたため、言葉の端々が変化したり意味不明の言葉になっていたりするが、その中に女性の月経の不浄、女性は身分の別なく血の池地獄へ落ちるとする思想と如意輪観音の救済がうたわれている。

「産は女の大厄」と言われるようになっての生活の中では産は死の危険を常にともなっており、その無事を神仏に祈願すると同時に女性の生理作用を神仏を汚す罪深きものとする思想がうかがえる。

一方、十九夜講は女性達の数少ない娯楽、慰安の場であり、また情報交換の場であった。山田熊夫氏はこのことについて「わが国の家族制度や、徳川幕府の農家に対する政策が十九夜講を生む一因となった」と記されているが、かつての農家の嫁取りには労働力の確保といった側面があり、朝一番の水汲みから日中の野良仕事、夜なべと息つく暇もない毎日の中で十九夜講が一つの休養の場となったことは想像に難くない。

また十九夜講が情報交換の場として、例えばもともと安産祈願の講であるから、出産、育児などの話題は当然出たであろうと思われ経験の浅い若嫁さんにとって様々な不安を解消するのに役立っていたと思うのである。

#### むすびにかえて

以上、県下に残る十九夜講について見てきた。

この十九夜講についてはまだまだわからない点が多い。

何故これが19日に行われ、如意輪観音を本尊とするのか、また奈良県下において何故この講が大和高原一帯に集中的に見られるのか、今後考えてゆかねばならない。

註① 庚申懇話会編『日本石仏事典』

註② 太田古朴「大和の十九夜塔」（『歴史考古』第9号）

註③ 同 上

奈良県立民俗博物館研究紀要 第9号

発行日 昭和60年3月30日

発行所 奈良県立民俗博物館  
大和郡山市矢田町545（大和民俗公園内）

印刷所 辻井写植印刷社  
奈良市法蓮奈良山町1925-5